

# 自分史

脇田勇

## 自分史

人はみんな誰でもこの世に生を受けて、それぞれの家庭をはじめとした社会生活の中で色々な人生ドラマを生み出し、そして一生を終える。が、……あの時、もっとああしていれば良かった、あの時代、もっと違う生き方があったのではなかったらと思うたり、あの時代の育ち方が今日の自分を形成し、今の自分があるんだと思うたり。そういったことを考える機会もなく、あの世に行ってしまうとは……と思う今日この頃。

定年退職後もじっとしていられない性格も手伝って、労働組合の機関紙編集の手伝いや、体調と都合の許す限り組合員の相談や会議に出席したり、組合OB会での繋がりを大切にして、時には自分たちの労働争議で頑張ってくれた弁護士などが担当する裁判の弁護団会議に出席したり、傍聴支援に裁判所へ出かけたりしている。

地域では、2014年3月まで8年間保健委員をやっていたが、63歳で退職後に何もせずにいるのは早くボケては困ると思い、退職後の2ヵ月後には即決でシルバー人材センターへの登録をし、今では除草作業班に所属して6年になった。足腰が悪い老夫婦、独居老人家庭の庭などの除草、休日診療所の除草や掃除作業などで汗を流し、「キレイにしてもらってありがとう」と、喜ばれることを励みにしている。幸いご指名を受けることが多く、やりがいを持って励んでいる。

健康づくりという面からは、年に一度の西区PTA・OBバレーボール大会に向け、月に三度ぐらいいある練習に参加し、昨年からは小学校のPTAバレーチームのコーチも引き受けて汗をかいている。高校時代から始めたバレーボールも、途中2年程はブランクがあったとは思いますが、50年以上続いているのは自分としては勲章ものだ。いつまでやれるか、いや今では体が続くところまでやってみようと思っている。

そして、除草とバレーボールの練習の谷間にはスーパー銭湯に通い、疲れた腰や肩をマッサージ機でほぐしたあとは、レストランで一杯飲んでリフレッシュといった生活を続けている。それらの生活のお蔭か、人間ドックで引っかかるのは「悪玉コレステロールが少し多い」、「慢性胃炎の疑い」、「痩せすぎ」などで、病院通いしているのは歯の治療だけである。毎日飲む薬もなく、疲れた時や肩・腰の痛みなどに飲む疲労回復の錠剤くらいなもので、ありがたいことに今の所は癌とはお付き合いはない。

私は貧乏大工の一人っ子として育った。終戦後は誰も同じだったと思うが、幼いころからの苦難な生活もあり、自分としては波乱に満ちた充実した人生を過ごしてきたと思う。謎めいた出生の秘密もあるとはいえ、今日まで私を支えてくれた多くの人たちに感謝しつつも、70歳を過ぎたこの時期に自分の歩んで来た道のりを振り返ることになった。

## 目次

### 1. この世に生を受けて

謎めいた出生

波乱に満ちた小・中学生時代

無茶クチャ充実した高校生活

### 2. 青春時代・・・京都からそして名古屋へ。初任給16,500円からのスタート

### 3. 結婚する！・・・バラ色の人生か、はたまたイバラの道か

### 4. 自慢の喉・声に異変が

### 5. 賃金差別との闘いと新しい組合運動の始まり

不当な差別是正に立ちあがる

誰でもひとりでも、パートでも加入できる労働組合

### 6. 銀行員として集大成・最後の職場

### 7. 妻が「うつ」になりまして

### 8. 残された人生をどう生きるか

## 1. この世に生を受けて

### 謎めいた出生

1946年(昭和21年)5月、京都市東山区(現在は山科区)西野様子見町にて長男として出生(生涯一人っ子)。父、光造届け出と戸籍にある。母ヨシエからは、「ほんまは勇と言う名前と違ったんや。出産届けが罰金寸前のぎりぎりやったさかい、慌てて役場で勇と書いてしもうたんや」と聞かされていた。どんな名前だったんだろう。

両親の死後、母のタンスの中に古くなり紫がかかった戸籍謄本を見たら、確かに5月に生まれたのに届けは12月になっていた。この空白の半年間に何があったのか。単純にど忘れであったのか。……だけれど、何があったと思わざるを得ない謎が潜んでいたのもその謎を追ってみた。

それはいつだったかは定かでないが、組合の仲間とメーデーに参加した後、自宅近くの庄内緑地公園でバーベキューをやった際に母も連れて行った時だった。みんなで後かたづけした後の帰り道、アルツハイマーの初期段階であった母はアルコールも入っていたこともあったのか、みんなと歩きながら「勇には、私が死ぬまでに話さなあかんことがあるにゃ」と意味シンの発言をしたのが、未だに頭の隅に残っている。

父光造は、京都市東山区にある粟田口(近くには平安神宮や知恩院などがある)で、大正元年に5人兄弟の三男坊として生まれたとのことだった。何故かは知らないが、兄弟の縁は切っていたと聞いていたので、私もこの年まで父の兄弟とは全く面識はない。

父の写真は、20代ぐらいの若かった頃の和服姿で、奈良公園に行ったのであろうか、友人と自転車を支えながら楽しそうな表情の2、3枚と、軍隊での集合記念写真などが残っている。母との出会いについては、聞いていたのは当時流行っていたスマートボール(玉突き)店で、女給をしていた母に惚れ、通い詰めてその後一緒になったとのことであった。鍋釜だけ下げて一緒になったとのことで、両親の結婚式の写真どころか、なんと二人が一緒に写っている写真は一枚も見当たらなかった。

終戦後も頑固一徹な請負大工として、料亭の床の間や注文住宅の仕事で家計を担っていた。手先が器用だったこともあって、戦時中は上官の命令で机に「隠し煙草入れ」などを作ったと聞いたことがあった。結構立ち回りがうまかったのであろうと想像する。

また、小学生の項で詳しく述べるが、戦争に行くまでは一滴の酒も飲めず「神棚」にお供えした酒はカビが生えたと、毎晩のように繰り広げられる夫婦喧嘩のあと泣く母に聞いた。父が戦争でいつ死ぬか、明日の命があるか分からない毎日の軍隊生活の中で覚えたようで、戦後帰ってからは別人のように大酒呑みになってしまっていたとのことであった。このことが私の中で、「戦争は人間を変えてしまう怖いものだ。戦争なんて絶対いやだ」と思うようになった原点でもある。

両親は京都の山科で夫婦生活をスタートさせ、その後山科と大津の分岐点近くの追分の長屋、滋賀県片と浜大津の中間点ぐらいにある太間町の長屋、東洋レーヨン滋賀工場前のM工務店の事務所暮らしと、生後から幼稚園時代までに転々と住居を移したが、何故そんなに転々としたかは定かでない。その後、東洋レーヨンの近くに土地を借り、当時のお金で100万円を後に出てくる山科のH寿司屋の2代目に借金をして、板張り・トタン屋根の云わばバラック建てで、土間のお勝手とトイレ、6畳一間とい

う住居を構えた。小学校には田んぼのあぜ道が続く農道で、片道30分前後かけて2、3人で通ったが、今思えば随分遠かった印象が残っている。

室戸台風だったか覚えがないが、台風の強烈な風でトタン屋根が吹き飛ばされて青空天井になり、台風の過ぎ去った後に父とトタンを拾い集めに歩いたり、冬にはなんか顔が冷たいなあとと思って目をあけると、三角屋根の隙間から雪が舞い落ちてくるといった記憶の残るお粗末な建物であった。今では笑い話のようだがその家に私は高校時代まで過ごした。

母ヨシエは、どこで生まれかは語らなかつた。聞いていたのは捨て子同然で尋常小学校3年生までしか学校に行っておらず、水商売を転々としたらしかった。私が何年生の頃か記憶にないが、ヨシエの母と名乗る女性と弟という人物が前後して訪ねてきた記憶があるがそれきりだった。

それ以外に母親にまつわる話がないというのは寂しいものである。子供時代や青春時代の太正という時代をどのように生きてきたかは全く不明である。ただ、戦時中に飛騨に疎開していた頃に疎開先に馬がいて、馬の人慣れした目がとても可愛かったという話は聞いたことがあった。

ともかくにも私が生まれた京都・山科が舞台となって、永遠に知ることができなかったヨシエの意味シンな発言の謎が解けないまま、私は生涯を終えることになる。永遠の謎が……。

私が、親戚のように慕っているお宅がひとつある。同じ山科駅前には、現在3代目とその息子が営んでいる老舗の寿司屋がある。初代は名古屋市中川区下一色の出身で、若くして京都に飲食業の修行に出て、やがては山科にある京都薬科大学近くの国道一号線沿いに麺類を主体とした店を開業し、その後は寿司部門も行っていった。2代目になると、山科では老舗の寿司・料理仕出しの店として発展していった。私には、初代は口のうるさい、煙たく怖い存在のおじいさんだったが、当時山科にあったカネボーの工場で社員食堂の運営を行うなど商売を拡大していった。2代目の時代には、料理仕出し部門や住宅地を中心に寿司店をのれん分けをしながら支店網を広げて行った。3代目はカネボーの職員であった女性と結婚した。今では3代目もお爺ちゃんになったが、今でも「兄ちゃん、姉ちゃん」、「勇」と呼び合う間柄である。

実はここにもちょっとした謎が浮かび上がる。このお二人さんが付き合いだした頃、「姉ちゃん」を紹介すべく単車に相乗りをして、わざわざ大津の我が家を訪ねてきたことがあった。

その「兄ちゃん」のいつ頃からかは知らないが、私の両親はその店に出入りしていたようで、母は食器洗いをしながら兄ちゃんのオシメを替えていたと、母から聞いていた。そして、年末の年越し蕎麦の出前には父も手伝っていた。そして、年明けの日の出の前に親子3人で寒い道を身を縮めながら我が家へ帰った。元旦のおせち料理は、ひと眠りしてからであった。

そんな深いお付き合いをする原点は何にあったのかは、母親の意味シン発言にも関係すると思うのだが「死人に口なし」である。そうした過去の体験の思い出でや、会話を辿るなかでその謎にも触れていきたい。

#### 幼年期

母は母乳が出なかったため、私は粉ミルクで育ったと聞いていた。それが影響したかは定かでないが、小学校までは体は細くチビっ子で整列すると前から1、2番目であった。



この頃の大衆娯楽といえば「映画」の時代で、父は仕事を終えると映画館に直行、母は私を抱っこして映画館に。私がお腹を空かして泣き出すと、父が胸元で温めていた粉ミルクの哺乳瓶を取り出して母から与えられていたそうである。私の映画好きはこの頃から始まったのか。

当時の幼稚園は小学校と隣り合わせの所にあり、一人で電車に乗って通った記憶がある。

その頃、近所のおばさんが大きなおっぱいを見せ、「おっぱい飲む？」と誘われて、私の口に乳房を当てて飲まそうとしたが、母乳というものを知らなかったため、巨大なおっぱいからピューッと出る様子に驚き、「いやや！」と拒否した記憶がうすうす残っている。以降、母乳の味というものを知らずしてこの年まで来た。

### 波乱に満ちた小学生～中学生

小学生の低学年になると、月に一度は土曜日に一人でバスに乗り、山科の寿司屋へ1万円を持って借金返しに通った。バラック建ての自宅建築資金の返済のために。そして、その日は必ず一泊して遊ばせてもらった。特に2代目の電気機関車が大好きだった。当時は高いおもちゃであったため羨ましかった。寝小便をしては、Aさん(1代目の親戚筋?)のお世話によくなった。そして、日曜日の帰りのバス停には、必ずあば(京都では、親しいおばさんのことをそう呼び、2代目の奥さん)が見送ってくれた。山科の店に入ると、「あっ!きつねうどんが来た」とみんなに冷やかされ、きつねうどんと巻きずしの切り残りを喜んで食べていた。その麺類と寿司好きは今日まで続いている。

あばや、2代目は私を自分の子供のように親切にしてくれた。あばや煙たかったお爺さんの連れ合いの、あばの次女のTと一緒に良く京都・京極の映画館や地元の映画館に連れてもらった。あばには、映画の帰りには志津屋だったかの大きなぷりぷりのエビフライや、不二家でホットケーキやチョコのエクレーをよくご馳走になった。Tとは、学年が一つ下でよく遊んだ。借金の返済に行っているのである。

ある日、その次女と二人で一緒に風呂に入った際に、「大きくなったら結婚しようなあ」と言ったことがあって、それを聞いた煙たいお爺さんにこっぴどく怒られた記憶がある。

ここで、私のご幼少の頃から中学生までの写真、そして私の長女の同じ頃の写真、Tの写真を見比べると驚くことがある。それは、Tと私の長女の顔がまるでそっくりな写真が何枚かあることである。このこともひょっとすると、と考えさせられる疑惑の一つでもあった。

父は、2代目が滴いを大きくしていくに従い、従業員の寮をお爺さんの生活していた離れの地下に造ったり、調理用の大きく分厚いまな板や、箱寿司(京都では鱧をウナギのように焼き、それを蒸し、寿司包丁で潰して寿司飯の上に乗せたもの。他の地方では押し寿司と言っているそうだが)の長方形の箱型を釘を使わずに作ったりと、父の仕事は丈夫で長持ちと重宝されていた。

一方、我が家での父の生活といえば毎日仕事を終えると帰り道を酒を飲んで帰り、夕食時にも酒を飲み、石山のパチンコ店で遊んだり、釣り道具などを買いに行っては帰りにまた酒を飲んで帰ってくる。いったい一日にどれほどの酒を浴びていたことか。おまけに出かけるときには、今ほど飲酒運転が厳しくなかったせいもあってか、単車に乗って出かけていた。近くの国道1号線でパトカーのサイレンが聞こえると、母と一緒に家を飛び出して現場を探しに行ったり、東海道線の沿線近くに住んでいたため、列車のキキキー!という嫌な響きの急ブレーキと、ガシャガシャン!という停止音を聞くと、「ひょつと

して事故ったか？」と不安になり、現場に駆けつけたりした。人身事故の場合はよく首実験（父か否かの人相確認）に走ったりと、毎日、毎晩心配の種が尽きなかった。

そんな母子の心配も顧みず、無事に帰って来ても決して平穏ではなかった。母が注意すると反発し、身近にある湯呑や土瓶、茶碗・皿が飛び交う大乱闘が始まる。私が泣きながら真ん中に入っても止まる様子ではなかった。最後は母が泣き崩れてその日は収まる。大工の鬼瓦のような分厚い手で母は殴られ、そのせいで母の歯はほとんど折れて自分の歯はなかった。

飲み屋のツケや、大工道具、高い釣り道具などはクーポン券（割賦販売のチケット）で買ったりしていたため、酒屋やクーポンの集金者が請求に来ると、母は「飲まさんといてと頼んでるのになんで飲まずの！飲まさんといて！払わへんで！」と、よく息巻いていた。毎月の25日を過ぎる頃、母の留守に取り立てが来ると、私は慌てて押し入れに隠れていた。この経験が、のちに月賦払いやクレジットカード嫌い、借金嫌いの土壌を育てたのであろう。就職してからも、銀行の窓口でのクレジットカードの勧誘は大の苦手なセールスだった。

また、いつのことだったか覚えはないが、いつもの夫婦喧嘩が止まらないため、下駄ばきのまま家を飛び出し、泣きながら真夜中の国道一号線を山科に向けて歩いたことがあった。大津と京都の分岐点の逢坂山検問所でお巡りさんに呼び留められ、「今から山科の知り合いのおじさんに夫婦喧嘩の仲裁を求めに行く」と告げたが、「こんな時間に家を飛び出し、親が心配しているので帰った方がええ」と言われたが、まだ始発の電車も走ってなかったため、追分の京阪電車のホームで仮眠を取り、こっそり家に帰って支度をして学校へ行ったこともあった。夫婦喧嘩の終盤は「出て行け！」「出ていったるわ！」の応酬だったが、よくあの世に行くまで別れないでいたと思う。これが俗に言う「夫婦喧嘩は犬も食わない」と言うらしいが、二人の間で泣きながら止めようとしていた私はいったい何だったんだ！あとに述べる事故も含め、余りにも母の苦勞・負担が大きかったままで、あの世に行ってしまったと思う。

母は、家計の足しに百個作って10円とかの手作業の内職に励んでいた。私も宿題が終わると、よくおやつ代稼ぎに手伝った。母はへそくり作りの名人だった記憶である。でなければ我が家は企業でいえば、とっくに赤字倒産していたと思う。

そして私が小学校4年生のときに、ついに日頃の心配事が現実のものとなった。「酔っ払い大工、深夜トラック便と正面衝突」と新聞報道される事故を起こしてしまった。寒い冬のある夜、いつものように帰りの遅い父を待つ私たちに、巡査がそれを伝えに来た。「事故を起こして、日赤病院に運ばれた。」と聞かされた。母と私は怒りと安否を気遣いながら、涙と寒さからくる震えを押さえ、国道を小走りに病院に向かった。着くと直ぐに手術室に案内されて入ったが、血だらけの父は酒の匂いと消毒薬の混じった嫌な臭いが立ち込めるベッドの上で、麻酔が効かないのか痛苦しく喚いていた。

母からの連絡を受けて駆けつけてくれた山科の2代目が、「大丈夫か」と父に声をかけてくれたが、その時の父から返ってきた言葉が今も忘れられない。2代目に「金貸してくれ！」と、うめき声を発したのだ。2代目が「こんな時に何に使うね」、父は「今から飲みに行くにゃ！」であった。救いようのない飲んだくれの親父である。

幸い、顎・片頬・片膝の骨折のみで命は取り止めたが、15日間意識不明が続き、半年ぐらいの入院生活となった。退院後は、しばらくは柔らかいおも湯（おかゆ）やスープ状の栄養分を注射器に入れ、チューブで鼻からの摂取をしながら自宅療養をした。

しかし、あの病院の消毒薬の匂いのする病室での粗末な食事は辛く、今でも思い出すと匂ってくる気がする。その間、母は病室で付き添い看護につき、私は山科にしばらくお世話になることになったが、山科から大津へ汽車と電車に乗り継いで通学をするという寂しく辛い毎日が続いた。

事故の相手方である大阪の運送会社に母と何度か通った。事故の状況からトラック側も道路の真ん中を走っていたのでは、それは居眠り運転ではなかったのかなどの判断から、交渉に行ったのであった。会社は事故の原因や状況から、入院費用や後遺症まで責任は持てないという回答に対して、せめて入院費用だけでも出して欲しいという母の強い交渉の結果、会社側は入院費用だけは負担した。

父の自宅療養の間に私は家に戻ったが、母は収入が途絶えていたため山科の店で茶碗洗いなどをし、夕方に家に戻るとい生活がしばらく続いた。私は学校から帰ると宿題を終え、夕食の食材を買うために市場に出かけて夕食の準備をした。市場では、お店の女性に「あんたはえらいなあ～。恥ずかしい年頃なのによく気張るなあ」と、良くおまけしてもらった記憶だ。おやつを買うお菓子屋さんでは、「あのお菓子〇〇処（もんめ）、これを〇〇処ください」おやつを買って帰った。家に帰るとお米を研いで、父の大工仕事で出た木屑や切れ端で火を焚き、火のつきが悪いと塩をふりかけて、はじめチョロチョロ、なかパツパと母から教わった手順でご飯を炊いた。

この経験と、山科での出前持ちや茶碗洗い（中学生～高校生まで）などが、その後の自分の独身生活・共働き生活に大いに役立つこととなった。とはいえ、辛くて、寂しくて、悲しかった忘れられない小学生時代の思い出だ。寂しくなると、一人っ子の私は「お姉ちゃんが欲しい。いてくれたら・・・」（なぜか、姉）とすすり泣いた事も何度かあった。このような毎日の生活の中で、遠足だ、社会見学といった学校の行事の前日の夜には、熱を出して欠席するということがよくあった。そういった時は決まって、仏壇が閉じてあるにも関わらず、蠟燭の火が大きくなって近づいたり、小さくなって離れたりする幻覚に陥った。

中学1年生の時、先生の家訪問の際に「いくら叱ってもらっても結構です。気に障ったら遠慮なく叩いてやってください」と言う母に、A先生は「そんなこと言ってくれる親は余りいない」と苦笑いして帰ったものだ。それくらい強く厳しい母だった。

その後、父は徐々に回復していったが、毎日が琵琶湖のお魚さんとのデートであった。ある時には釣り大会で2等になったり、釣り雑誌に「琵琶湖の観音釣り」として表紙に写真が載ったりして上機嫌だったこともあった。それこそ雨が降ろうが、雪が降ろうが琵琶湖に釣りに行くのが仕事といった療養生活だった。たまに連れてもらい傍で糸を絡ませるたびに、「ほんまにお前はドンくさいやっちゃ」と嫌味を言われた記憶がある。今でも、思い出すと亡くなった親父の声が聞こえてきそうだ。

この頃の母は生活のやりくりのため、東洋レーヨンに働く共働き夫婦の私設保育園みたいに、幼子を預かりながら手内職を続けていった。育てた幼児は3人ぐらいで、そのうちの一人の女の子は私を自分の結婚式に招いてくれ、お祝いのスピーチも依頼されてやった。定年間近となった今では、悩み相談でメールもよこしてくる。といった長ーい付き合いの子もいる。今でも義理の兄のように慕ってくれてい



るが、随分と乳母車に乗せて守りもしたもんだ。その父親がこれまた大の麻雀好きで、その娘と私を大津の映画館に連れて行き、自分は麻雀屋で遊び、私は映画館で映画を見ながら子守りをさせられた。

そしてある日、現在まで続くカルチャーショックになる出来事が起こった。当時、伝承鳩を飼うのが学校で流行っていた。放課後の帰り道に鳩を飼うクラスメートのM君に誘われて、飼育を見せてもらうことになった。ところが、鳩小屋の出窓近くで卵から雛に孵らんとする状態で、産毛も生えかけたまま死んでいる鳩の雛を見てしまった。これが原因で、それ以降大好きだった「鶏肉」を敬遠するようになり、生卵も苦手になってしまった。

父もボチボチ働き出したが、私も夏休みや冬休みになると山科の駅前店で、出前持ち(配達)や茶碗洗いなどをして、バイト代とお年玉を稼ぐようになった。

中学校が火事に遭い、(当時の在校生が付け火をしたというのを、60歳過ぎての初めての同窓会で聞いた)校舎の半分が焼失して、2部制の変則授業を受けたこともあった。近くの野球好きのお兄さんに初めて野球というものを教えてもらって、近所の子供たち2、3人と稲刈りの終わった田んぼのなかで、泥んこになりながら夢中でボールを追いかけて遊んだのは、この頃が初めてだったと思う。それまでは、近所の子といえば女の子が圧倒的で「ままごと」「おはじき」「けんぱ」などの女の子遊びがほとんどで、全くのスポーツ音痴だった。

学芸会の練習ではみんなに冗談を飛ばし、先生にも笑われていたのに本番では緊張で舞い上がってしまい、セリフを間違えたこともあった。その瞬間を撮った白黒写真が残っているが、けっこうおちよこちよいな性格も持ち合わせていた。図画工作の授業のH先生は怖く、与えられた課題ができなかったり失敗すると、「こっちへ来る」と前に呼び出されて、T定規の角でコツンと痛い思いをした。私は痛かったのと、できなかった悔しさで、その先生の日直の際に特訓を受けに学校に出かけた。その時の先生は優しく、特訓のおかげで通信簿の成績が1ランク上がって喜んだことを覚えている。社会の先生は、戦争当時の日本の作る製品はお粗末で、随分インチキくさい商品を作っていた。鉛筆の上下だけに芯を入れて真ん中は空洞であったなど、今では信じられないような話の内容が面白く、時には真面目で怒りを込めて話をしてくれた。

卒業式の最後の教室で、担任のH先生が送る言葉として「人は人を愛する人間になれ、また人は愛される人間になれ。」と語ってくれた。この言葉は今でも自分の中に生きている。生涯忘れられない言葉だ。

前後するが、2年生になり担任の先生の家庭訪問を受けた時、「最近高校に行くのが当たり前であり、就職もその方が良いところに行けるので進学コースを選んだ方が良い」と勧められた。父の事故もあり家計が大変だったこともあって就職コースを選択希望していたのであった。その時、私は母に思わず「高校へ行くといったらお父ちゃんに叱られないか」と聞いた。後々、この言葉が「あの時、勇が高校へ行ってもええかと言ったのが忘れられへん」と申し訳なさそうに言っていた。父の了解も得られ、学期の変わり目からコース変更して、みんなに追いつくべく進学に向けて、リンゴの木箱の机の上で猛勉強が始まった。新聞に挟まってくる広告紙の裏側を使い、小指の外側が真っ黒になるぐらい活用した。

頑張った甲斐もあって昭和37年春、成績は下の方であったがなんとか無事に県立大津商業高校に入学することができた。この時にも学生服は山科のあばがお祝いに買ってくれたのである。校舎というも



の戦後アメリカの進駐軍の宿舎を流用していたため、板張りの教室や廊下には「禁煙」「騒ぐな」などをアルファベットでペイントされたものが教室など、あちらこちらに書かれていた。新校舎が建てられ始めたのは卒業する3年生になってからであった。

学校の隣には、右に近江八景のひとつである三井寺、左には現在市役所がある。後方には壬申の乱の史跡碑や、山頂には皇子山ゴルフカントリークラブがあり、前方には卒業後に整備された皇子山陸上競技場が完成し、琵琶湖大橋ができた時にはマラソンランナーのエジプトのアベベ選手が素足で走ったところである。現在も毎年の琵琶湖マラソンはここからスタートし、コースの途中には母校の粟津中学校もあり、テレビに映り出されるランナーと周囲の風景を見ながら「もうすぐ膳所公園や、粟津中学校や」と懐かしさもあり、興奮させられる。

### むやくちゃ充実した高校生活

入学して間もなく、これまで体格的（チビで痩せ型）にも体力的にも、日常生活からも余り運動部とは縁がなかったのに、少しでも運動したい、体を鍛えたいという思いから軽い気持ちで軟式野球部に入ったが、2、3ヵ月経った帰り道にバレーボールの顧問に着任したばかりのM先生に呼び止められ、「浜大津でラーメンでも食べていかんか」と誘われ、もう一人のU君とともに食堂に行った。ラーメンを食べながら、M先生は、「なんで軟式野球部なんかに入ったんや？」と質問を受け、「ちょっとでも体を強くしたい。鍛えたかった。」と答えた。すかさず先生は「同じ鍛えたいと思うのなら、わしと一緒にバレーボールをやらんか？わしも大学では陸上競技やってたけど、ここの学校に来てバレー部を担当することになった。バレーは初めてやけど、やるからには3年計画で全国大会を目指したい。」と熱っぽく語ってくれた。当時40円だったこのラーメン一杯が、U君とともにバレーボール部に入部する結果となった。ラーメン一杯での誘いが、今後の自分の人生を大きく変えるきっかけとなってしまった。また、この年から9人制から6人制に切り替わった最初の年でもあり、ルールの変更で練習方法も試合そのものも全てが新しい試みにチャレンジするという事になった。

さてさて、入部したまでは良かったが大変な試練が待ち受けた。それは同じ1年生でも中学校で経験してきた者と、全くスポーツに馴染んでこなかった私のハンディーは大変なもので、まさに地獄の特訓が始まったのである。

当時はまだ体育館での練習ではなく、細かい砂利がひかれた野外コートであった。下半身の強化目的での「うさぎ跳び」は終わると直ぐに立ち上がりせず、回転グレースは柔道の受け身のように、肩から腰を転がるように回転させてボールを拾い上げるため、これが痛くて痛くて肩や腰は赤から紫、そして最後は黒っぽくあざになった。スライディンググレース（今ではフライングとも言う）の練習では、胸から地面を這うように前に飛んでボールを上げるという、見た目はカッコいいが激しい練習だった。初心者は砂場で先輩が前にボールを放り投げる。それを胸で滑り込み、片手を前に差し出しボールを上げるという二つの連続動作が必要で、首・顎をまっすぐ伸ばさないと、砂を食べてしまうという始末。慣れるまでは砂を口の中から吐き出すのに難儀したものである。慣れてくると今度はその動作をコートでの練習となる。砂からは解放されるが、その代わりに骨盤の骨を打ったり、顎や胸板を擦ったりして満身創痍である。そして、練習が終る頃には体操着の胸元から擦り傷の血がにじんでくる。夏場これを毎日行なうと、夜には傷口が膿んできて下着を着替える時にくっついて大変だった。銭湯に行って裸にな

ると、肩、骨盤、胸板など色とりどりの上、湯をかぶると傷口の痛さで飛び上がってしまうといったひどい耐耐力が試される毎日が続いた。知らない人から見れば、まるで虐待を受けた少年そのものだった。

人間の体は良くしたもので、これが慣れてしまうと苦痛や打ち身や傷がなくなってくるから不思議なものである。そして、慣れとは怖いものもある。雨が降った日には、他の部活動の連中も集中する体育館（といっても当時は進駐軍の体操や卓球などに使っていた天井が低い建物）の片隅で、スライディングでどれだけ滑るかの競争をしたものだ。やはり砂地のコートより、板張りの方が摩擦抵抗が少なく、心地よく滑る快感を感じた。そのおかげか、10年前頃までは病院などに行った際、内科医師の診察で胸をポンポンと叩かれると、医師からは「必ず骨が固い。丈夫な骨やなあ」と感想が漏れた。

こうして、先輩たちにしごかれながらも基本的な動作を身につけ、1年生の新人戦でピンチサーバー（一応、サーブには多少自信がついていた）としてデビューした。が、やはりこれまでスポーツの経験が全くなかった私は、足は震える、心臓はパクつくといった具合でガチガチに緊張し、サーブミスをしてしまった。ほろ苦いデビューだった。

ここで転機が訪れた。冬休みや夏休みには強化練習のために合宿を行うことになったが、私はアルバイトをして家計（授業料・小遣い）を支える必要があった。そういった意味でも特に正月前後は山科の寿司屋も忙しく、これまで世話になった山科への義理もあって、出前や店内の手伝いに行きたかったので、監督にその旨を正直に話した。監督は、「合宿に参加できない理由はわかった。それならバレー部にはマネージャーがいらないし、わしが職員会議や出張で面倒見れない時にみんなの面倒を見たり、手助けをしてくれんか。」と言われ、プレーイングマネージャーとしての転向を勧められた。当時のわが校バレー部は弱かったこともあり、部員も少なくチームを練習する場合は、私もコートに入って練習できる。監督の補佐としてバレーは続けられると考えた上で、引き受けることにした。そして、監督一人で男女指導兼任ということもあり、女子のコーチ役をすることもあった。

この時代は今とは違って、体力・筋力づくりの機具もなく、冬場になると裏山に登っては岩っころを拾って持ち帰り、それを腹の上に乗せて腹筋強化をしたり、頭の後ろから前へ岩を移動させて背筋や腕の力を鍛えたりした。そして、隣の三井寺の長い階段は格好の練習場となり、階段をうさぎ跳びや手押し車、おんぶをするなど、随分とお世話になった。

今日のようにカラフルなトレーニングウェアなんぞはまだなく、練習着といっても体操の授業の上下白色の着衣のままだったため、スライディング練習の影響で胸元はボロボロとなって母に雑巾を縫い付けてもらっていた。そんなある日、監督は「お前ら、これから練習試合などで他の学校に行く時にそれでは格好が悪い。みんなで揃えたらどうや」と言われ、質素で地味な紺色の上下（トレーニングウェア）を身に着けることとなった。

監督と私たちの目標である3年計画で全国大会という目標の2年目に入ると、これまでの監督の指導、みんなの熱心な練習と努力が徐々に実り出してきていたのであった。一年生に後の滋賀県クイックナンバーワンとなるI君をはじめ、中学校でバレーボール経験者が6人ほど入部してきた。これまで我がバレー部は1回戦ボーイ（初戦敗）であったチームが、秋の新人戦で、いきなりベスト8のチームを見事破ってしまったのである。このことがチームのみんなに勝つことの喜びと頑張ればできるという意識を植え付けた。

県のベスト8になり、大津市の市民大会でも高校の部で優勝をした。この時の審判は東京オリンピック選手にもなった菅原さん(東洋レーヨン所属)がホイッスルを吹いてくれたのである。ベスト8となったり優勝したりすると、県内のあちらこちらの高校から練習試合の申し込みも来るようになった。また、監督は京都や大阪のチームにも練習試合の申し込みをしたりと、土曜日の午後は近隣の高校、日曜日は京都や大阪へ他流試合に出かけるようになっていった。そして、なにより強い県外のチームとの練習試合を重ねることにより技術も自信もついてくる。また、選手としてのマナーやラインズマン(線審)の作法を学ぶこともできた。そのうち県内では私も審判もやることがあった。夏休みになると近江八幡の監督の自宅に寝泊まりをして、近くの学校の体育館を借りての強化合宿もやった。

3年生になり、1年生が最初10人ぐらいは入ってきたが練習は激しいし、夕方はボールが見えなくなるまでやったため、1、2ヵ月で「退部したい」という者も続いた。理由を聞くと「そろばんを習う時間がない」という1年生には、「よし、明日から30分早く学校へ出てこい。教えてあげる」と、生徒会に机と椅子を借りて部室でそろばんを教えたこともあった。(中学の珠算部の副部長の経験を生かして)

そして、3年生の初夏、運命の時がやってきたのである。これまで目標として頑張ってきた、全国大会の出場を決める県のベスト8チームの試合が東洋レーヨンの体育館であり、まさに試合が始まろうとしたその時、館内放送が流れた。「大津商業の脇田さん、お電話がかかっていますので至急大会事務局までお越しください」とのことであった。何事かと受話器を取ると、「脇田か、すまん。今、大阪の日赤病院に入院した。あとのことは頼むわ」という余りにも大きな衝撃的な出来事だった。緊急の事態に大会運営の先生方の配慮もあり、臨時に他校の先生を監督代行に手配してくれたが、選手の技術や癖などのすべてを掌握しているのは私であったため、ベンチでの役割は大変なものであった。そんな中で、当時膳所高校の監督をしていたO先生(我がチーム監督の友達)のアドバイスも受け、「入院した監督のためにも、絶対優勝しよう」とみんなで声をかけあった。そして、そのみんなの気持ちがひとつになり奇跡が起こった。これまでベスト8、4となったことはあったが、なんと見事に念願の優勝を果たし、晴れてインターハイの出場権を得たのであった。学級委員長にも選ばれたが、バレー部の面倒と今後の対応で多忙となることが予測されていたため、クラスに迷惑をかける訳にはいかず辞退して再選挙をしてもらった。

3年生になった新学期早々には就職案内が職員室前に張り出され、会社案内のパンフレットも見られるようになっていた。当時はまだ縁故就職もかなりあったが、私にはそんな親戚や兄弟筋もないため自分を信じて頑張るしかなかった。当時は地元企業より大手の銀行関係や商社などの募集が早かったこともあり、別に銀行に拘っていたわけではなかったが大きな会社の試験をいくつも受けて、面接や試験慣れと度胸をつけてからどこか良い条件の会社を探せば良いと考えていた。担任の先生からは「脇田の今の成績では、銀行を選ぶなら地元の滋賀銀行だよ。大手の都市銀行は無理なんでは・・・」と言われていたが、学校の推薦は一発でOKであったため、取りあえずは当時の住友銀行、東海銀行、大和銀行を順番に3日連続で大阪に試験を受けに行った。結果的には、「縁故なし、本人の実力次第」「若さとバイタリティー」と謳う(うたう)東海銀行から内定通知をもらった。両親はもちろん、山科の2代目も名古屋に本店のある大きな銀行だと喜んでくれた。



これで就職も決まったし、続いてバレー部も優勝したし、あとは卒業まで「バレー道」をひとすじに高校生活を全うすれば良かった。県の代表が決まってからはさらに忙しくなった。担任の先生からは、「脇田、何々高校から練習試合の申し込みが来たで」と連絡を受けることが増えた。京都や大阪に練習試合に出かけても、マネージャーなど部員が審判をやっているところが多かった。そのため私は昼休みになると弁当を持って図書館に行けばコーチ編や、審判編についての本を探して猛勉強をした。生徒会との部費予算の交渉やインターハイや近畿大会参加のための交通機関の学割乗車券手配などもした。先生に引率をお願いするために職員室へ出かけ、「バレー部はインターハイが決まり、○月○日に全国大会がありますが引率の先生がいません。どなたかお願いできる先生は見えますか?」と、懇願した。結果、インターハイには社会と書道を担当しているO先生が、「バレーボールなんて全然素人でわからんけど、引率で行くだけならええよ」と応えてくれた。私は、「タイムのタイミングや選手交代などのベンチワークは、こちらでやりますので是非お願いしますと引き受けてもらった。

引率の先生も決まり、それ以降は練習のメニューを増やし、大会に向けての激しい練習をおこなうとともに、出場校にふさわしいマナーを植えつけていくために、登校後は部室に弁当を置かせて授業中の早弁（授業中に教科書で手元を隠して弁当を食べる行為など）を禁止した。朝はサーブの練習を中心に、昼休みには放課後の練習に備えてネットを張った。また、中間試験や期末試験前は、一週間の間は練習が原則禁止であったため、ボールは使わずに軽いトレーニングなどで汗をかいてから退校するようにしていた。

夕方近くになるとボールが見えにくくなってくるので、皇子山ユースホステルへの街路灯を頼りに練習を続けた。ある日のこと用務員のおじさんが、「コラッ！バレー部いつまで練習してるんや！」と竹ぼうきを持って叱りに来たことがあったくらい練習に没頭した。今も3年に一度くらいOB会が開かれているが、必ず後輩たちに「脇さん、あの頃おまんまに練習厳しかった。脇さんに整列させられて、一度ほったを叩かれたことがあったけど痛かった。忘れられん。」(今では、ヤバイ行為)と冗談まじりに言われる。

父親には「何でそんなに毎日帰りが遅い。やめてしまえ」と、叱られ続けたが入部当時ならいざ知らず、ここまで来て辞める訳にはいかなかった。逆に父親に「試合に行くときの救急箱が欲しいので作って欲しい」と注文し、作ってもらったことが嬉しかった思い出。

いよいよ憧れのインターハイは石川県立小松体育館で熱戦が繰り広げられたが、我がチームは全国の参加チームの平均身長で下から2番目に背の低いチームであった。そのうえ、初出場という舞台はそんなに甘いものではなく、初戦は黒星、敗者復活戦をジュースで負けるといった結果に終わった。苦い経験をしたが、続いて近畿大会が待ち受けていた。この大会には転入してきた先生が監督を引き受けてくれた。全国大会の無念さを晴らすべくみんなは頑張ってくれてベスト8に入った。次の相手は名門チームのひとつ大阪商業大学付属高校（通称、大商大付属）との対戦となったが、あっさり完敗した。さすがに全国大会出場常連校は強かった。

この間も練習後には何度か、女子のキャプテンと大阪の日赤病院に入院した監督のお見舞いに行った。監督の症状や経過を聞きつつもチームの状況なども話した。監督の病名は腎臓の機能低下とのことであった。「病院の食事はまずくてたまらなん。脇、今度来るときは内緒で寿司を買ってきてくれ」とせがまれたこともあった。思えば2年生の夏過ぎから練習後や皆のトレーニングの合間などの休憩時間



に、「脇、ここを押さえてくれ」「腰さすってくれ」と言われてマッサージをしたが、この頃から監督の体には異変を知らせるSOSが出ていたようだ。

その監督も治療を重ねていたが、私たちが卒業して数年後に治療の甲斐もなく両方の腎臓が機能不全となってしまい、本来なら監督の結婚式であった日が、あの世に送り出すという悲しい結末となった。ラーメン一杯で誘われ、初めてバレーボールの世界に導いてくれた恩師との辛い別れとなった。今でも、このバレーボールでの体験が大きな柱となって、生涯スポーツとなっている。私を心身共に鍛えてくれた青春時代の貴重な出来事であった。私が、あの世に行ったらまたラーメンをご馳走してもらえるだろうか。……合掌。

何回目かのOB会のあとに有志一同で監督のご自宅へお参りに訪問した。亡き監督のお母さんはお寺さんと呼んでくださって、まるで法事のようなであった。お母さんは、監督宅で合宿したこともよく覚えておられ、「そう言えば、あの子はよく脇、脇と呼んでいたね」と当時の思い出を語ってくださった。帰りには、伊吹山のふもとにあるお墓にもみんなでお参りをした。

3年生の秋になれば引退ということになるところであったが、しばらくの間はU君とS君と私で男女のコーチ役を引き受けて後輩たちの面倒を見た。私は、銀行の入行式前日の3月31日まで学校に通った。この頃は、山科でのアルバイト収入の貯め込みが役に立って、3年生の時の授業料と通学費用などは自分で賄うことができた。我ながらなんと親孝行な息子だったかと思う。そのうえ、就職祝いの背広は山科の2代目が誂えてくれた。今ではサイズが合わなくなったが、その時の記念にタンスの整理箱に入れて残してある。

ここまで色気のない真っすぐな自分ばかりをたどってきたが、淡い学生時代の初恋を含めた若き日の思い出話にも触れておきたいと思う。初恋と言うか女性を初めて意識したのは、小学校4年生の頃のK幸子さんで鹿のような澄んだ瞳、色白でスマートな「女の子」。恥ずかしくって声さえかけることができなかった。学校の帰り道には必ず彼女の家の前を通っていたくせにである。中学生時代にはI明子さんで、彼女も瞳が大きく健康的な色黒な女の子だった。文通と言うかノートの切れ端で内容はもう忘れはしたが、よくやり取りした記憶だ。ところがなんと、数年前に初めて参加した同窓会の会場で受付にいたではないか。あの当時の顔も体型は当然のように変化してはいたが、「あれー？あの子、Iじゃないかな」と思いながら近づくと、向うもわかったらしくニコニコとほほ笑んでくれた。お互い歳はとって、面影は残っているものだ。高校では、英語の成績が良く卓球部のI千枝子さんの真剣に練習に取り組む姿勢に魅かれた。雨の日の体育館での練習が嬉しかった。意識した女性、好きになった女性はこちらといったところであった。

また、映画好きで育った私は中学校の頃、デビューして間もない里見浩太郎に魅力を感じた。そして、クラスメートのS量子さんもファンとのことだったので、プロマイドの交換とか、ファンレターを出した記憶がある。今では、押しも押されぬ本格的時代劇俳優である。確か本名は佐野〇〇だったと記憶する。私には先見の目があったと自負している。

そして、女性では吉永小百合という女優を知ることになる。彼女の出演した「赤い薔と白い花」を見てからというもの、完全にサユリストになってしまった。高校1年生のとき、「青い山脈」の彦根ロケに吉永小百合が来るというので、同じバレー部のクラスメートとジャンケンで負けた方が、休みを取って写真を撮りに行くということになった。結果、私が勝ったため彼が撮ってきてくれた1枚の小さな小

さなカラー写真を今も大事に保管している。これまで観た映画はざっと70~80本を超えたと思う。当時の「ロテウたのアルバム」などの番組などで、彼女が歌っている場面を見つけると、山科の3代目にもらった中古の6・6カメラをテレビの高さに合わせ、シャッターを切った。今も私のアルバムにはサユリのページがある。観た映画の題名の走り書きと共に。当時、歌はさほど上手と思わなかったが（本人には申し訳ないが）、歌う彼女を見るとさぶイボが立つぐらい興奮した。映画では1962年の「キューボラのある街」（浦山監督・早船ちよ原作）が特に印象に残っている。役柄に真っすぐに取り組む彼女の演技と、何かを訴えようとする真剣な眼差しに私をサユリストにさせた。私の永遠のアイドルである。

## 2. 青春時代・・・京都から名古屋へ「16,500円の初任給生活のスタート」

### ①社会人のスタートは京都から

明日からはよいよ社会人という前日までバレー部の女子の指導に学校へ通った。その最後の3月31日は雪が舞う生憎の天気となったが、後輩たちはソフトボールを計画してお別れ会をやってくれた。

昭和40年4月1日緊張の中、関西総務部のビルで入行式が行われた。今日とは違い、この頃はまだ高卒の採用が多かったため、大卒は大きな支店に1人から2人くらいの配属であった。関西の各支店にはだいたい高卒の男性1人と女性が2人から5人くらいの新入行員といったバランスで、現在の高卒採用はなしとは大違いであった。私は自宅からも通える西四條支店（現四条大宮支店）に、美女2人と一緒に配属されたが宅からも通勤は十分可能ではあったが、「可愛い子には旅をさせろ」の言葉を自ら選び、単身者の寮である桂寮に入ることにした。

支店に配属された事務的な手続きのなかで、初任給16,500円の給料からスタートしたわけだが、5,000円の社内預金を開始。10年以内に百万円を貯めるという目標を立てた。当時5,6千円の寮費を払ったり、何やかんやで毎月2,3千円の赤字を出すと、一年先輩の女性Aさんに内緒で借金をして、給料日に返済するというやり方を繰り返していた。（個人的な貸し借りは、内規違反に該当）また、余裕のある時にはと考へ、別途積立預金口座も作っていたのである。その当時はまだ宿直制度があったため、正月休みには寮の食事もなかったし、桂寮の寮生の殆どは帰省していた。私は年末・年始の手当が割高ということもあって、新婚さんや世帯持ちの先輩たちからプレミア付き（交代の寸志）で宿直当番を代わり、連泊をして積立預金に入れて小遣い稼ぎをした。そして、正月2日には職場の女性陣に声をかけ、ごちそうを持ち寄り支店の食堂で新年会をやった。3日目は映画を見たりして自分の時間を作って過ごした。

入行2年目ぐらいだったと記憶するが、母から父が胃潰瘍の手術をすることになったと連絡を受けて病院に見舞いに行った。幸い回復も早かったが、我が家の家計にはそんなにまとまったお金の余裕はあらずがなく私が捻出することにした。

古びた和風の桂寮には、市内5支店に勤務する各地からの独身男性が共同生活をしていて、寮母夫妻が15人前後の食事を賄ってくれた。当時新入行員は先輩たちとの相部屋となり、私を含め3人の新入行員がそれぞれ同居した。ところが、私の相方である岡本先輩に挨拶しようと思っても毎日帰りが遅く、残業が多くて大変なんだなあと思っていた。私が布団に入ってうつうつとし出す頃に、部屋に帰ってくる人だった。岡本さんは副寮長でもあり、食堂には岡本さんの描いた油絵が何枚か飾ってあった。

後にこの岡本さんとは名古屋に転勤してからも切っても切れない仲間関係になろうとは予想できなかった。

やがて1人部屋に移ることになったが、殺風景な6畳一間に湯沸しポットとコップ、湯のみなどを片付ける水屋（食器棚）と本箱を買い、水屋の扉になっている部分には大切なものを収めるために鍵もつけた。そして、毎日時間割表を作り寮に帰ると一定の時間を銀行の事務手続きの教本を勉強した。日曜日には部屋を片付け、畳に雑巾がけも行って綺麗にしていた。狭い家に育ったこともあって「万年床」は嫌で、毎朝布団を畳んで押し入れにしまっていた。そんな生活をしてきたことを寮母さんは知っていたようで、寮を所管する厚生課の担当者が年に一度ぐらいに寮母さんとの打ち合わせや視察に来た際には、必ずといっていいほど私の部屋を窓越しに見学していったそうだ。（良いとも悪いともとれるが・・・）

寮生活に馴染みだした頃、相部屋生活をしていた岡本さんから「京都支部には、コーラス部というのがあって、毎週水曜日に練習しているので一緒に参加しないか？」とか、「今度の日曜日にどこどこで〇〇という集いがあるので楽しいから来ないか？」などと声がかかるようになったので、特に用事のない限り参加することにした。初めて体験する楽しそうな催しばかりで感動した。また、当時京都の金融機関の間ではインターバンクといって野球やバレーボールなどの球技、合唱コンクールなども交流の場として年に一度開かれていた。合唱コンクールで私たちのコーラス部の披露する歌は、世界の民謡からわらべ歌、労働歌まで幅広く取り上げたため、他の参加合唱団からは楽しく明るい元気なうた声に注目を置かれていた。

バレーボールでは、同期の大卒の中に広島崇徳大学（当時はバレーボールの名門校）出身のYさんがいた。9人制での試合であったがYさんと私がメンバーに入り、今まで東海銀行は1回戦敗退が常であったが決勝戦まで進み、常勝の地元京都銀行と対戦し敗れたものの大殊勲であった。

コーラス部については、職員組合（行員は自動的に組合員となり、給料から組合費が天引きされるユニオンシップ制）の活動として、京都支部の青年・婦人部・文化部がそれを後押ししてきた。当時の青年・婦人部は組合学校や幅広いレク活動などの中心的役割を果たし、京都支部の組合活動を支えていたのであった。こういった様々な出合いが、今後の自分を導くものとなっていった。しかもその活動の中心部隊が我が桂寮生たちだった。京都御所での金融の仲間の交流会や、登山なども活発に行われていた。そんな中で、私の今日まで続くニックネーム「ワンちゃん」もそれらに参加する中で私に対する愛称として生まれていった。コーラス部でいつも楽しくアコーディオンを演奏し、歌を指導してくれた先生は山本さんと言って、今日までみんなから「忠やん」と慕われている。京都うた声協議会に所属する素晴らしいリーダーだった。私が名古屋へ転勤後に結婚することとなるが、その結婚式にも京都のコーラス部の仲間数人と忠やんは、アコーディオンを担いで参加してくれ、当時歌った懐かしい曲を披露してくれた。また、後の私たちのたたかひの中でもその名前は登場する。

やがて、その活発であった青年・婦人部の役員であり、活躍していた桂寮生を中心に怪しげな風が吹き荒れだした。まずは畳谷金二さんという滋賀県の比叡山高校卒の先輩で、頭脳は優秀で正義感も強く行動力抜群で思いやりもあり、みんなから「金ちゃん、金ちゃん」と慕われ、とても信頼されていた先輩。桂寮生でもあった彼とは吉永小百合ファン・サユリストということで話も合い、私に大きな影響を与えた人物だった。その畳谷先輩は、組合の役員選挙において京都支部長に立候補して見事当選を果た



したが、まるで明智光秀の三日天下ではないが、わずか10日後に名古屋へ異動させられた。そして、しばらくして青年・婦人部で活躍していた桂寮生に異動が発令されて、順次名古屋を中心に飛ばされていったのである。さらに、桂寮が古くなったということで廃寮が決定されたのであった。多くの桂寮生は大阪府内のマンモス寮であった高槻寮へ転寮となったが、私はこの一連の流れに疑問と不安を感じたため、あえて自宅通勤を選択した。怪しげな風は、当然のように青年・婦人部の結束力を徐々に弱めていった。

そして、残っていた私はコーラス部で、先輩たちの思いを受け継いでいった。いつ頃だったか、コーラス部にこれまで付いていなかった名称を決めることになり、ある歌の歌詞と私のニックネームをダブらせて「メーワンコーラス」となったが、京都支店の警務の人に「メークコーラス」と嫌味を言われるようにもなった。こんなところにも怪しげな風は吹いてきたのであった。今思えば怪しげな風というよりは突風が吹き荒れたといった方が正しいかも知れない。毎週早帰り日となっていた水曜日には、各支店からコーラス部に参加する男女が集まってくるが、その帰りには三条大橋近くの「餃子の珉珉」へ連れだって行った。これまで、ニンニク料理はほとんど口にできなかったが、餃子のおいしさを初めてみんなから教えてもらった。当時一人前80円ぐらいだったと記憶する。

そして、入行後3年ぐらい経った頃に銀行側と組合側が共同した(資金・運用費は銀行負担で、当時大手の企業では次々とアメリカ式・QCサークルと呼ばれたものが導入されて来た)「行友会」というものが発足し、全国各地で銀行内に合唱部が作られていった。京都には私たちのコーラス部があり、運営が銀行の管理下に置かれて自主的なサークル活動が潰されないかなど、様々な議論のすえに守り抜くことを決意して存続させることになった。関西地区での発足式典行事では、私たちのコーラス部がリードをして、行友会の出来立ての歌を披露と歌唱指導もした。

西四條支店での思い出は、同期の美女2人と持ち回りで、映画鑑賞後の誕生会や、市内の散策も良くやった。もちろんコーラス部にも一緒に入って楽しく余暇を過ごしていた。今は亡くなったが、シベリア帰りのK支店長は世間の人の考えるピシッ決まったスーツ姿の銀行の支店長とは違い、格好は構わないユニークな方だったがお客さんにも職場の行員にも人気がある人物だった。仕事が終わる頃になると、「脇田君、今日は何か用事あるかい?行こうか?」と、先斗町にある路地のおでん屋さんによく誘ってくれた。支店を出る頃にはまだその店は準備中であることを知っている読書家の支店長は、必ず本屋さんに寄って本を買ったり、時間つぶしをしてから冬はおでん、夏は鱧で作った魚そうめんなどを食べて帰るといった具合だった。また、K支店長は冬になると京都と滋賀県の県境にある比良山系に、支店長と友達とで作ったという山小屋に職場のみんなを誘ってくれ、一泊して酒を酌み交わしながらゲームをしたり歌を歌ったり、ワイワイと騒いだものだった。

付け加えておくと、この先斗町にあるおでんさんは支店間で発生した出来事や、本部検査部の臨店検査実施店を探る情報交流の場でもあった。検査部の実施する早朝検査は、前日から京都に宿泊するのが常であったので、よく各支店の管理職などがこの店を利用していた。実際に女将さんから「〇〇支店へ行かほるみたいどすえ。〇〇に泊まらほるみたいやから」と、情報が伝わったのであった。

世の中はそんな甘いものではなく、そんな気さくな支店長の後は一転してムチャクチャ厳しい支店長が赴任してきた。今だったらまさにパワハラ行為で訴えられそうな気性の持ち主で、目標管理ことでもうるさい人物だった。夏のボーナスシーズンや年末のボーナスシーズンになると、「絨毯外交」(店周活



動とも言った) というものがあり、各金融機関の職員は預金勧誘チラシや年末にはカレンダーなどを配布しながら、「口座開設依頼」や「ボーナス預金の勧誘」を一軒一軒訪問するのである。見ず知らずの個人のお宅や会社を訪問することなどは、私をはじめ女性の職員は余り気乗りのする楽しいことではなかった。

ところがある日のこと、私が訪問した染物関係の会社の部長がたまたまた支店長の友人だったこともあり、その場で多額の小切手を切って私に渡し、預金口座の開設となった。これがきっかけで、支店長は私に個人客中心の外交(得意先回りの係)に任命した。そして、店頭で定期預金の解約などがあると、「誰の担当地域だ!脇田、すぐ穴埋めに出てこい!」や、「今月の目標は?たったそれだけか!」などと、とにかく目標数字にとてもうるさい親父だった。そもそも定期預金というものは、いざという時のために少しでも金利の良い預金に預けておくものであり、その時がくれば当然お客様は引き出しに来るのが当たり前のことであるが、そんな理屈が通らない支店長だった。職場のみんなは、支店長の激しい雷が落ちると「亀岡の禿げ」(京都府・亀岡市出身)と陰口を叩いたもんだ。

でも外回りをして勉強になったこともいくつかあった。ネズミの糞だらけの屋根裏のようなところで、絞りを懸命に編んでいる老職人さんの技を見たり、ちりめんには長浜ちりめんと丹後ちりめんがあること。染物には色染めや黒染めがありそれぞれに組合組織があること。そして、染物屋さんとお話をするためには玄関では相手にしてもらえないので、実際に染物をしている現場にお邪魔をしてお話することが必要なことなどを学んだ。いろいろ勉強しながらの外回りが続いたが、ある生地の間屋さんでは「銀行を辞めて、うちに婿養子に来ないか」と好意的に声をかけられたりもしたこともあった。

いつだったか、日頃は面と向かって文句や意見を言える雰囲気のない支店長に、堪忍袋の緒が切れて腹をくくり宿直の時に電話を架けた。「気が弱いもので、なかなか支店長に面と向かって話すことができませんが、聞いてください。」と、日頃の思いをぶちまけたこともあった。そんなある日の事、支店長は当時建っていた支店が老朽化したため、阪急電車の四条大宮駅が建て替えることになったので、それに併せて隣接する場所に新築移転をすると発表した。そして、新築移転での開店時の過大な業績拡大目標を当然のように要求した。新規に獲得する法人・個人顧客目標や、貸出金・預金の増加目標を掲げて猛烈な移転運動を展開することになった。私は、連日連夜の残業で終電車に間に合わず、支店に泊まり込む日もあった。果たしてこのままでは新店舗完成時まで体力が持つか不安な毎日が続き、辞めたいと思ったこともあった。

そんな大変な毎日の中で、ついに私にも怪しげな雲が覆いかぶさってきたのであった。昭和44年6月に名古屋の上前津支店への転勤辞令が出た。名古屋に行くのは生まれて初めての事であり、この辞令が私にとって今後の人生と銀行員生活の大いなる転機となった。

そして、親元から遠く離れることとなったため、両親が寂しくなると思い、今までも犬を飼う事が多かったこともあり、コリー犬をプレゼントすることにした。

## ②名古屋へ転勤

上前津支店は、名古屋の繁華街の一つである栄地区から南へ少し行ったところであり、近くには大須の商店街、もう少し南へ行けば金山地区、東の方には鶴舞公園と本店からは比較的近い場所で、当時は

まだ市電が走っていた。単身寮は中村区の稲葉地町にあった寮生100人ほどだったと思ったが規模の大きな寮に入った。またもや同期入行者との相部屋生活が始まった。

初めて名古屋駅に降りた際、空腹だったので新幹線の高架下にあった食堂街で食べた名古屋名物「味噌煮込みうどん」にはビックリした。まずは麺がパンツのゴムのように固かったことや、味噌味のだし汁の濃さには参った。その後は、ピタリと味噌煮込みうどんは避けるようになった。今でも味噌煮込みうどんは余り食べようとは思わない。

転勤後、しばらくは預金や計算(勘定突合や伝票整理)等の内部事務、預金の窓口を担当したが、さすがは名古屋に本店のある所だと思った。というのも京都の支店とは違い、法人取引先の預金残高や融資額が2桁から3桁ぐらい大きかったことだ。テレビや新聞に広告・宣伝される有名な取引先も数社あり、プロ野球の中日ドラゴンズ球団も取引先だった。

勤務環境の変化か、今まで眼鏡はかけていなかったが眼鏡の着用がはじまったのは転勤後まもなくだった。何はともあれビックリしたのは、いや怖かったといった方が正確かも知れないが、仕事のなかでの女性の使う言葉だった。「何やってんの!」「早ようやりゃー!」「ダメだがねえー!」などなど、次々と飛び出す言葉全てが命令口調であり、名古屋はなんと怖いところだと思った。そして、そのような毎日のなかで、1、2年後には肩・背中・首などに痛みや凝りを覚えるようになり、時々針や灸にも通うようにもなっていた。

しばらくして、銀行に自動支払機(ATM)が初めて設置されたのもこの頃だった。融資係に配置換えになった際に、外貨両替とこの自動機の担当にもなった。当時は今のように入金機能はなく、引き出し専門の機械だった。近くのYWCAの美人米国講師が利用しようとして、ニコッと笑顔で私を見つめ、「どのように扱うのか教えて」と問いかけているようだったので、私は英会話には全く自信がなかったが、動作と片言の英語でしのいだ。でもこれをチャンスとばかりに、外国人が自動機の利用をされるときに「暗証番号ってどう説明すればいいのかわかるか」など、片言の英語のレッスンを受けたことも良い経験になった。ひょっとすれば「フォアシークレットナンバー」は、私の作り出した新語だったかも。(笑)

寮生活での思い出はやっぱりバレーボールだ。当時、寮生対抗の野球とバレーボールがあり、高校時代にバレーボール部に所属していた同期の寮生が3人ほどいた。これまでは西春にあった単身寮に、大卒のバレー経験者がいて絶えず優勝していたとのことであつたが、見事にそのチームに勝って、稲葉地寮が初優勝を遂げることができた。同期だった寮長は祝宴で、その優勝カップにビールを注ぎ、みんなで回し飲みをして喜び合った。

そんなある日の仕事のことであつた。「脇田さん、電話」と告げられ、電話口に出ると「今日、仕事は早く終わりそうですか?出来たら少しお話がしたいのですが。5時過ぎに支店の前でお待ちします。」と、聞き覚えのない男性からの電話だった。私は「どなたでしょうか、お顔も知りませんので・・・」と言うと、「こちらは存じ上げていますので、お時間は取らせません」とのことだった。仕事を終えて、支店を出ると黒塗りの車の傍に二人の男性が待っていた。「お食事しながらでも・・・」と誘われたが、私は「用事があるので行けません。どういったお話ですか?」と聞くと、「京都時代の豊谷さんとか、Tさんについてお話を・・・」と答えたので、これは変だと思い「何もお話することはありません。失礼します。」と返事をしてその場を立ち去った。あとから分かった事だが、当時銀行の人事関係のお偉い人で警察・公安とパイプを持つ人物がいたらしかつた。そういった状況の中での流れが、私たちのリーダー

一的存在であった豊谷氏の三日天下に終わった京都支部長選挙から、相次いで名古屋に異動になった桂寮生、そして私へと襲ってきた怪しげな風の正体がつながったのであった。

ようやく名古屋の水にも慣れて落ち着いてきた頃、懐かしい京都から転勤してきた仲間と再会を果たすとともに、名古屋にも西三河や津島などで「うた声」・「演劇」・「職場誌」づくりなどの自主的なサークル運動を、地域の金融機関の仲間たちと活動をしてきた職場の仲間がいることを知った。企業の枠を越えて広く産業別に、あるいは地域の労働者との交流・団結などをめざして活動をしていたのであった。一方では、名古屋でも労学に参加する仲間を中心に、職場に「うた声サークル」を作りたいという声が上がリ、京都でお世話になった山本忠やんにお願いをして、アコーディオン演奏してくれる人を紹介してもらい立ち上げ、市内のお寺などを借りて続けていった。

組合支部主催のバスハイクやスケート教室などでは、持ち前の関西弁（怖い名古屋弁の人々に、関西弁はおもしろく、滑稽なのか）で、バスの車中では歌唱指導をはじめ、ゲームやクイズなどを指導したりと、解散前にはバスガイドさんから、「私は何もすることがなかった。降参、これをプレゼントします。」と、バス会社のマスコット人形を貰ったこともあった。また、バレーボールも年に一度、支店対抗の試合があり地区で優勝すると県内を対象に本部大会もあり何度か出場する機会があった。相部屋生活から個室寮に移った際も、そこの若い寮母さんたちから、「厚生課のバレーの大会があるので、コーチをして欲しい」と頼まれ、夕食後に敷地内のコートで短期集中で指導することに。結果は前回よりはるかに良い結果が出たと報告があり、寮母さんたちからお礼のビールを頂いたこともあった。バレーボールの経験やうた声運動で培ったものを、組合運動やリクレーシヨンの場で有意義に生かすことができた。

ここで少し、組合の組織などについて触れておきたい。当時の東海銀行職員組合は、市中銀行従業員組合連合会（市銀連）に加入していて、市銀連三原則の①縦割り組織の原則、②単組自主性の尊重、③経済闘争重点主義にもとづき、平和運動や政治運動には取り組んでいなかった。平和を愛する思想や啓蒙の構築、時の政府の打ち出す政策が労働者の労働条件に与える影響や国民生活にどう影響するのかをチェックし、時には行動することが労働組合の大切な役割であるにも関わらず、そういった労使協調路線の組織実態であった。

当時の職員組合は次のような組織構成で、専従である中央執行委員（全国の支部代議員の投票による）は10名程度、中央委員（各支部代議員から互選で選出され、40～50名程度）、支部代議員・執行委員は、支部の組合員数によるが10名前後で職場の組合員の直接投票とされてきた。しかも、これまで支部執行委員長はなぜかほとんどが支店長代理という中間管理職が担ってきた。職場では、支店長を除くとほとんどが組合員であり、職場は分会と呼んで直接投票で職場委員を選出し、その代表を職場代表委員と呼んでいた。年に何度か「職場懇談会」という、支店長と職場委員が職場の要望意見を提案したり、支店長からの要望を聞いたりとする場を設けていた。ゆるやかな団体交渉であるが、労使協調の組合らしく職場の不安や不満を支店長側が吸収し、職場の運営の潤滑油としていた。

そのような中で、「労働組合こそが人間らしく生きるための条件を満たすために、自らが作り上げた団結の組織」という観点で、私たちの職員組合の変革をめざして、1970年に「労働組合運動学習会」（略称：労学）なるものを結成した。●大幅賃上げの獲得 ●労働強化をなくし、人員増加で明るい民主的な職場作り ●真に国民に役立つ銀行作りなどを基本にすえて、自主的、民主的な労働運動を進め



ていくことを目的に発足させ、職場の労働環境や労働条件などについて意見の交流、職場の労働者の悩みや困りごとを改善するため、それらの改善策や解決を求めて定期的に開催していった。この学習会は、思いを同じとする東京や大阪の職場の仲間にも声をかけて全国的に広がりをもせていった。そして、職員組合が年に一度開く全国大会の議案書の問題点の討論や、組合役員選挙立候補への取り組みなどは、全国規模で労学の仲間が集まって泊での学習交流集会などを開いていた。

ある休日に開いた名古屋での学習会会場に、なんと休日であるにも関わらず人事部の調査役二人が私たちのいる会議室付近で、まるで刑事の張り込みのシーンを見るように参加者のチェックをしていたのであった。それをたまたま休憩時間にトイレに行った仲間が見つke、抗議をして追い返したという事件もあった。

職場委員まではこれまでの立ち振る舞いで当選することができたが、やはり支部の執行委員・代議員に当選するには徐々に妨害や嫌がらせなどで困難になっていった。私の支部役員選挙への立候補には、職場代表委員を務めていた先輩から「この支店からは、今まで当選した者はいない。当選は難しい。やめた方が良い。」と妨害も受けたが、労学のみんなで決めた方針に従い立候補した。そして、初めての役員選挙では、なんと10名位の定員に対して見事トップ当選を果たしたのであった。二期目には支部執行部の書記長に選ばれ、全国の中央委員4~50名のなかで最年少・25才の支部書記長の誕生となった。

当時は本部の執行委員が何年かに一度、職場の要求や要望、意見を聞く「分会オルグ」というものがあったが、私たちの支部執行部の役員に労学の仲間が2名、3名当選していたため、職場の生の声を組合活動に生かすべく、支部独自のオルグや、女性を対象とした婦人部会、労務職員との懇談会など、各層と要求や要望、意見を汲み取る活動。組合学校、夏のキャンプ、秋の紅葉巡りなど組合無関心層を減らすべく幅広い活動をしていった。

1970年に開かれた全国大会では、労学に参加していた全国の仲間たちが、代議員総数147名のなかで15名、代理出席1名と一割を超える仲間が大会に臨んだのであった。大会では私たちの発言を制限するような議事の運営が行われたため、議長の不信任動議を出して議長が交代するというハプニングも発生した。翌年の大会には、代議員総数151名中33名が私たちの労学メンバーという勢力となって、夫婦別居転勤問題、多くの問題点があった資格制度、ボーナスの一律要求、お客様への過払いなどの現金事故弁済制度、女性行員の違法な深夜労働の実態、人員削減による慢性的な時間外労働と賃金不払い(サービス残業)、あとに述べる頸肩腕症候群対策など、今まで組合の中でまともに討議されてこなかった労働条件や労働実態を明らかにし、それぞれの解決策や改善提案をしていった。

また、これまでの東海銀行の経営に携わる役員のみならず、歴代人事部長はそのほとんどが職員組合の委員長経験者で、「組合OB」といわれる一部の人たちによる任命制となっていた。そのような非民主的な組織を変えようと東京から1名、愛知から2名の3名が中央執行委員選挙に立候補したため、なんと職員組合が発足して初めてという定員オーバーの選挙となった。だが敵もさるもの引掻くもので、「立候補者の紹介および所信表明」という簡単な選挙公報?で、決められた枠の中に入る所信表明しかできず、しかも私たち以外の立候補者の推薦人といえば、全国の支部長連名の推薦になっていた。それを見ただけで反執行部派か否かの候補者かを選別できるようになっていた。そして、誰がどの候補者に投票したのかも分かるような投票の秘密さえ確保できない選挙制度だった。投票の自由が保障されない選挙



制度では、少数派が当選するのは極めて困難であったため、一定の批判票は獲得したが当選には至らなかった。引き続き75年までは毎年立候補をして、私たちの主張と民主的な組合作りを訴え続けていったのであった。

私に取り上げた全国大会でのいくつかの発言のなかでも、その後の金融機関と各自治体の取り組みの改善に大きな影響を与え、その後女性行員を中心に労働時間短縮と事務負担の軽減となっていたものがある。

その発言というのは、毎年4月30日は各地方自治体の市民税・住民税の締切日であり、各企業が毎月給与天引きしていた従業員の税金を納付するため、取引のある金融機関に持ち込まれ、その事務処理が膨大な事務負担となっていた。各自治体の指定金融機関への銀行・支店などに送付する納付書とその控えの切り分け作業と集計事務があり、持ち込まれた税金の合計金額と集計額が一致しない場合は突合作業に大変な時間がかかった。主として、それらの作業は女性行員が中心に行うことになっていたため、一致しない場合は一致するまで事務作業は続けられた。支店の中には午後11時、12時、翌朝の1時、2時と残業が続けられていた。そのような法違反が黙認されることは許せず、出来る限りの情報を集め、女性行員の違法な深夜労働の実態を取り上げて改善策を迫った。これまで大きな納付書や小さな納付書、さらに納付書の領収書欄が右側にあったり、左側にあったりして各自治体の書式はバラバラであったが、今日では多くの自治体で同一の書式に変更・統一され、大幅な事務処理の軽減につながっていたのであった。

また、当時銀行で使われていた伝票類を分別し、勘定を集計する計算機器（プルーフマシーンと呼んだ）は、タッチするボタンが重く・固いため、どうしても指先に力を掛けてしまい、指先や手首、肩などに過重な負担を強いた。支店のその日の勘定を一致させるために、所定の目標時間までには打ち終わることが求められていた。特に女性が多くこの機器操作を担当していたこともあり、重い肩こりや背中、腕のしびれ、頭痛などで「雑巾さえも絞れない」、「包丁も握れない」、「子供を抱くこともできない」といった症状が発生し、しかもその治療には苦痛と時間が掛かる。中には長期に休まざるを得なくなるといった、治療が困難な「頸肩腕症候群」（頸腕障害）という病気の発症が広まり、なかにはその症状に耐えきれず退職するといった職員も出た。電話交換手の仕事をしている企業の職場などでも、この病気は広がっていった。このことを重視した私たちの労学は、別に「命と健康を守る会」などのサークルとも連携して、改善策や発症させない職場づくりを労学で取り上げた。私はある日の中央委員会の席上で、みんなで議論した対応策を議題提案をして訴えた。この問題は最終的に労災扱いにすることはできなかったが、勤務内容の軽減、時間内通院と治療費の全額銀行負担、疾病休暇の認定を求める取り組みによって、「企業内認定」という扱いを銀行は認めることになった。さらに、計算機器の機種改善やシステム変更など銀行側は検討せざるを得なくなった。この企業内認定は今日も生き続けている。

ここまで、自分を随分かっこよく書いたが、最初の頃は「はい！」と挙手をして大勢の支店長代理や本部のエリートコースの代議員、中央委員、本部執行部などを前にして、大それた発言をするというのはムチャクチャ大変な勇気がいった。もともとは気が小さく、緊張しやすいタイプの私が、そのような人々の前に立ってしゃべるなんてえらいことであった。時には緊張で、トイレに走りたくなる衝動にさらされたこともあった。

### 3. 結婚する！ バラ色の人生か、はたまたイバラの道か

そんな毎日の忙しくも充実した生活のなかで、労学の学習会やうた声サークルにも参加し、隣接する大須支店にいた色白美人が40年以上も連れ添ってきた一学年下の幸子さん。彼女も職場委員や婦人部の活動に参加していたが、よく気がつき控えめではあったが物事の考え方はしっかりとした芯のある女性に思え、胸のときめきを感じた。ある日、私は幸子さんに「結婚を前提に付き合ってもらいたい」と思い切ってプロポーズをした。なんとひとつ返事でOKをしてくれた。寮へ帰って布団の上で「バンザイ」と叫んだ。とっても嬉しかった。

そして、付き合い始めた最初の頃の対話のなかで、自分が一人っ子で貧しい家庭に育ったこと、こつこつと貯めた貯金は100万円そこそこしかないこと、料理や家の雑用もやれるので、結婚してからも共働きを続けて行きたいこと、人事部には睨まれているので出世は見込めないこと、これまでの苦労話や人生観などなどを話した。中村区の酒屋さんの娘として育った幸子殿には、私と違って7人兄妹とその子供たちと両親、そしてその周りには多くの親族が存在していた。自分の境遇とはかけ離れた別世界の状況に、いくら説明を受けても理解できなかった私は、「銭湯によく貼ってある凶暴事件の犯人写真のように誰がどういう関係の人物かを作ってくれんとわからん」と冗談を飛ばしていた。ゴールインに向けて、今後のスケジュールなども二人で相談しあった。

両親を連れて彼女の家挨拶に行った際のこと、なんと食事が運ばれて来たテーブルの上には、なんと名古屋名物コーチン（鶏肉）が姿・形のまま私の目の前に飛び込んできた。この光景には参った！思わず体中から脂汗が・・・「幸ちゃん、ワンちゃんが鶏肉が食べられないと知っていたら前もって言っておいてくれたら良かったのに・・・」と、幸子殿は家族から叱られたのであった。結局、鶏肉の周りにあったサラダなどをいただいたものの鶏肉には手をつけることができなかった。

無事に両親の引き合わせは終わったものの、父親は昔人間そのものであり「なんで結婚しても名古屋に住むのか。一人息子を取られたような気になる」と、ずっと腹の中で思っていたようであった。やがて長女が生まれ、孫の顔を見るため名古屋に来た時も何かの会話が面白くなかったのか、「もうええ、帰る」と立腹してさっさと帰ってしまったことがあった。「そんな無茶言いな！結婚したからと言って、折角人事部の目の届く名古屋に転勤させたのに戻すわけがあらへんがな」と心の中でつぶやいた。

いざ結婚という時が近づいてきたが、ここでいくつかの難題にぶち当たったのである。名古屋は娘三人を嫁に出すと家が潰れると言われるぐらいに、お金をかけるということだった。7人兄弟姉妹の下から2番目（女性は4人）の幸子さん。まず、結納金というやっかいな問題だ。先にも書いたが貯金はわずかで、自分の信条からも結納金制度に抵抗感があった。人身売買じゃあるまいし。そして、結婚がうまくいかなかった場合は男側が、結納金を倍にして女性側に支払わなければならないというものどうも納得できなかった。テレビドラマ・半沢直樹の「倍返し」だ。親戚やご近所などの手前「形だけでもなんとかならんのか」と、両親と同居していた兄夫婦の間で不満があったようだった。

次の難題は、結婚式は会費制の結婚式でやりたいと申し出たことである。当時名古屋では、まだ会費制の結婚式は世間一般的ではなく、幸子殿の両親からは相当な抵抗感があったが、式にかかる費用は会費制結婚式ということからも、全て会費で捻出したいと主張した。

最終的には「酒屋の娘の結婚式にビールぐらいは負担したい」との申し出があったため、甘えることになった。

また、嫁に出すための衣装類もあれこれと話があったようだが、幸子殿も最終的には式服だけほど妥協したのであった。家具類は大須商店街にある家具屋の赤札のついたバーゲン商品で買い求めることにした。こうした結婚に向けての準備段階で、幸子殿は何かと親兄弟からも相当問い詰められたりして、涙したことも多かったと後で聞いた。

結婚式を1973年6月11日に決め、「結婚式実行委員会」が二人の支店の職場の仲間、労学の仲間、幸子殿の妹と彼氏などで構成して準備会でスタートしたのであった。結婚式の立会人(普通の結婚式では仲人にあたる)には、京都時代からの先輩の置谷さん夫婦をお願いした。楽しい雰囲気の中で進められた結婚式の準備会だったが、そんなある日の事、「結婚式当日に、大須支店は支店長主催の卓球大会が行われるので参加希望者が減りそうだ。」との話が舞い込んだ。私たちの結婚式は、「どこかの政党のパーティか集会のようになるので、参加しない方が良い。」と、ここにもあの怪しげな風が吹きつけてきたのであった。

その影響で、実行委員以外の出席予定者はガタッと減った。私の支店の次長や担当代理、そして組合の支部役員たちも出席してくれたのにである。酷い妨害であったが、私の中学校時代の恩師やアコーディオン演奏者の忠やんと京都時代の元コーラス部の女性二人が参加してくれたり、高校時代の同期のバレエ部の友などなど、まさに全国規模で128名が出席してくれ、会場となった貸しビルの二部屋が満席となった。

式の合間に参加者に回された色紙には、幸子殿の姉から「本当に良い結婚式になり、感動した。」など、親戚・兄弟からも温かいメッセージが書かれてあった。「ありがたい。会費制結婚式が理解してもらえた」と感激した。

ここに参加費一人1,500円の結婚式は無事に終えることができた。新婚旅行も多少残った参加費を頂戴し、リュックサックを担いでの山登りスタイルで、能登半島一周をめざした行き当たりばつたりの旅立ちだった。名古屋駅への見送りには、実行委員会の仲間をはじめ、支店の卓球大会で出席を妨害された幸子殿の支店の仲間も参加してくれ、ホームはまるで芸能人のように大勢の仲間に見送られての恥ずかしい出発となった。

そして、アパート住まいからの共働き生活がスタートしたのであった。私は幸子殿との結婚前の約束通り、まずあることから実行した。帰宅途中の地下鉄を降りるとスーパーが直結していたので、先に仕事が終わって駅に着いた方が、地下鉄の伝言板に「今夜は私が買って帰りますや、おいらが引き受け」などと伝え、夕食の準備をするというルールを作って実行していった。

結婚して翌年の5月の末に長女が誕生した。初出産であり、ずいぶんとつわりで苦しんだ幸子殿が無事に出産をしてくれたが名前を決めるのに随分悩んだ。というのも私たちは勇と幸子と世間一般に良くある名前であったからだ。悩んだあげく「晶」とした。性格は裏表のない水晶のように澄み切り、意志は固い子に育つようにとの思いだった。

産休明けには、今日のようにきちんと制度化された保育所もなく、企業においても長い育児休暇制度はなく、共同保育所のお世話になることになった。二人で協力しながら自転車での送り迎えをしていったが、雨降りなどにはタクシーを使わざるを得なかった。時には幸子殿が残業で遅くなると連絡を



受けたりすると、必死になって仕事を終えて気持ち的にはバスの中や地下鉄の中で走っていた。「本当にお口前で、良く寝てくれて手数のかからない赤ちゃん」と保育士に言われていたものの、なんのことはない。家に帰ると一転、夜はちよっとも寝てくれない親不孝な娘だった。(笑)

そうこうしているうちに、豊谷先輩から「西区に手ごろな新築マンションに入居したが、まだ空いてるので申し込みをしないか」と、声がかかり申し込みをした。運よく当選通知がきたため、1年と数か月でアパートを出て転居することになった。

ところがなんと、年子となる2人目の妊娠が発覚したのであった。一人でも共同保育所の送り迎えは大変だったし、2人目が生まれると自転車での送り迎えも一層大変になると幸子殿は決意をし、自動車学校に通うこととなった。仕事を終えて幸子殿は長女を迎えに行き、別棟の豊谷さんの奥さんに娘を預けて自動車学校へ。私は帰宅すると長女を迎えに寄って夕食の支度をし、幸子殿の帰宅を待った。自動車学校を卒業するまでは夕食の支度は私の日課となった。

やがて生まれた二人目は男の子だった。そして名前は「未来を志し、性格は朗らかに」という意味で、「志朗」と名付けた。その当時の共同保育所では使用後のオムツや肌着は持ち込んだバケツなどに・・・と今では衛生的にも考えられない対応だった。二人目が生まれると当然のようにそういった洗濯ものも増えた。幸子殿が二人を寝かしつける時間帯から12時頃までは洗濯とオムツ干しが私の役割となり、まさに激務の日々が続いたが、やがて子供二人は保育園に入園することになった。

しかしながら、当時の銀行は12月31日は休みではなく保育園が休園となるため、12月の最終の日曜日には幸子殿の運転で、私は子供二人を膝に乗せて大津の実家へと名神高速を走った。そして、年が明けた1月の最初の日曜日に迎えに行くといった状況が続いた。夏休みなども同様の生活スタイルで送り迎えをした。

そんな生活を送っていた4年後のある日、三重県の富田支店に転勤の辞令が出た。富田支店への通勤は大変であった。当時は地下鉄がまだ走っていなかったため、市バスで名古屋駅に出て、名古屋駅から近鉄電車に乗り継ぎをするのだが、支店の最寄り駅の富洲原駅は準急電車までしか止まらず本数も少なかったもので、結構通勤時間がかかった。特に冬場の駅のホームには鈴鹿山脈からの凍えるような冷たい風や雪が吹き荒れる日などは身に応えた。

幸子殿の朝の負担を考え、家族を起こさないように静かにそっと布団から抜け出し、朝食を取らずに7時前には家を出て名古屋駅に向かった。そして近鉄の桑名駅まで急行で行き、準急に乗り換える5分ぐらいのわずかな時間を利用して、駅の売店で「立ち食いうどん」をすすり、支店近くの喫茶店に寄ってモーニングを朝食としたが、今から思えば随分と不健康な朝食をしていたものだ。

1975年(昭和50年)、私はこれまでの労学の運動の進め方に沿って三重支部代議員に立候補することになった。先にも組合の選挙制度について述べているが、私たち以外の候補者の推薦人には各職場代表委員が推薦であった。そこで私は職場代表委員であった鈴木氏に推薦を依頼し、快く引き受けてもらったので「よし」という気分でしたが、やはり妨害が入った。立候補の締切日に鈴木氏は担当の上司に呼ばれ、「支店長が小料理屋で待っているから一緒に行こう」と誘われ、その店で支店長から私の推薦の取り消しを求められたのであった。そして、やむを得ず自立立候補をせざるを得なくなり当選にはいたらなかった。このことは、後の私たちの闘いのなかで詳細に述べたいと思う。



そんな中でも、めげずに職場に根を張る活動を進めていった。また、バレーボールの話になるが、職場の女性にバレーボールの経験者が2人いたため、彼女らと地区大会で優勝して本部大会に出ようと意見が一致。取引先をお願いをし、近くの体育館を使わせてもらって練習をしていった。大会前には役所職員の女子バレーチームとの練習試合などを重ね、三重県大会で優勝をして本部大会にも2度ほど連続出場することができた。

この頃から銀行の方針として「窓口セールスの強化」を目的として、全店的にテラーコンクールというものが繰り広げられていった。そんな頃にO嬢が転職してきた。彼女は京都支店にもいて、名古屋では地区の母店にも勤務していたため面識があったので、二度目の再会に驚くとともに喜び合った。その彼女とコンビを組んで、支店のテラーコンクールの推進者として支店の窓口の女性たちをリードして、三重地区で2年連続の優勝を果たして本店での大会に出場したこともあった。

しかし、T支店長が着任してからは支店の状況が一変する事態が発生したのである。取引先であり東海地区では名の通った製糖会社が、商社の保証が打ち切られて銀行からの融資がストップするという事態に陥り、倒産の危機に立ったのである。労働組合が強い会社であったため、その危機から銀行に融資の継続要請と労働者の生活を守れと、闘いを起こしたのであった。毎日のように「1円預金運動」を展開した。他のお客様が窓口近づけないぐらい何十人という労働者が支店に集結し、店内は騒然とした。

そして、いくつもいくつも1円預金の口座を開設するという運動が始まった。私も窓口で組合員の対応に苦慮し続けた。なかには涙をこらえながらの女性職員も出てくる始末であった。そのうち段々とエスカレートしていった。私たちの支店に組合員が来ない日は母店であった四日市支店にも同様の行動を取っていった。そのため、本部からも多数の応援者が配置され「特設窓口」なるものも設置され、手作業での対応をするといった事態になっていった。ところがその1円預金が他の支店で引き出される恐れもあったため、窓口でのトラブルを防ぐために閉店後一斉に記帳(コンピュータに入力)するなどの膨大な作業に追われた。

昼食休憩時間は、気分的に落ち着かず食事もし喉に通らず体重もガタ減りし、体力的にも精神的にも疲れ切っていた。この闘争は1年ほど続くことになり、毎日疲れ果てて帰宅したのであった。労学の仲間には、状況を説明して対処などを相談する一方、人事部の定期的な面談の際には「この争議が収束すれば転職させてください」と訴えたのであった。

長く続いた争議もやがて収束して落ちつきを見せていったが、しばらくの間はまた来るのではないかと、今度はいつ来るのかと職場の同僚たちの不安な日々が続いていた。金庫の中の棚には争議の時に作成された預金通帳が何百冊、何千冊と山積みになっていたのである。

そして人事部への転職要望が効いたのか、その後愛知県内のはだか祭で有名な国府宮神社近くの稲沢支店に辞令が出ることになり、通勤時間も1時間くらい短くなった。

転職して就いた業務は、一日の支店で発生する伝票類の仕分け、勘定の突合作業と勘定の集計表作りとその日その日の伝票類の綴り込み等で、前にも労働組合の活動の中でも述べたが、まだシステムがキーボタンが重いマシンのままであった。

でもそれだけでは済まなかった。というのも、相方になった先輩の男性が精神的に不安定な方で、今で言う「うつ病」であったため体調の好不調が激しく突然休みも多く、調子の悪い時に出勤するとマシ

ーンの誤操作など、事後対応が大変な状況になるといった具合だった。なぜか、この支店でも肉体的にも精神的にも落ちて仕事のできない。不安定な職場だと感じた。

しばらくして、これまで多くの女子行員に頸肩腕症候群を発症させ、労学が労働組合で改善要請していたマシンのシステムから、マシン操作のない新しいシステムに切り替えるという銀行の方針が出た。そして、何故か私の支店がこの地区の試行モデル店舗となり、私はその推進役を任命された。

その新しいシステムを開発した本部の事務管理部の担当者のもと、その新しいシステムの概要や運用ルールなどの指導を受け、支店内部の行員への説明会で事務の流れ・処理などを教えていった。新しいシステムを勉強していくには、当然これまでの内部事務処理を完了後に行うことになる。一日の仕事を終えてから勉強会や模擬実践を繰り返して、新システムへの切り替え目標の日時に向けて反復していくことになるため、当然のように事務処理に携わる行員は時間外労働が増えた。ところが、店長席から「脇田君は、当然時間外手当を請求してもらってよいが、教えてもらうみんなは勉強会なんだから時間外手当の請求をしてもらっては困る」と言うのであった。

当時は総合予算制度という名の下で、時間外手当の圧縮が叫ばれていて各支店、各係の時間外労働の数値が一覧表となり、支店長会議でのテーマにも上がっていた。多い支店は店長の評価にまで影響していたようであった。また、他の支店から新システムの見学に休暇を利用して来るという行員には「仕事のために来るのだから、休暇を取ってくるというのは止めて欲しい」と、説得を重ねた。今日もそうだが、当時の労働実態も人員不足による残業が多かったため、勉強会などは「自己啓発」という名の下でごまかされていたのであった。

私は「新しいシステムが導入されれば、今までの時間外残業は減るのだから切り替わるまではやむを得ないので、時間外手当は請求させてください」と店長席に訴えた。事務管理部の担当者にもこの事を報告して、了解を得ていたのである。銀行に限らずとは思いますが、本当に企業というのは小汚いというかセコイ体質を持っていると思う。今でいえば、「それってブラック企業じゃなか!」です。軌道に乗れば時間外手当も自然に減ることから、もっと大局的に見れないものかと。管理監督者失格だ。

その新システムも順調に軌道に乗り始めると、今度は地区の各支店への説明会や模擬実践の指導に事務管理部担当者と連携して新システムの運用に貢献した。安定的にシステムに移行したところで、職務の変更を命ぜられた。

今度は窓口のチーフとして定期預金や各種の届け出の受付や相談業務、そしてATMと両替機をもう1名の女性と担当することになった。これもかなりの事務負担で、接客中にATMや両替機の呼び出し音が鳴ると窓口のお客様に離席を詫言、走ってロビーに設置されている機械の対応をしなければならなかった。そのような毎日の業務の中でも、私のファンも着実に作ることができた。今度は、銀行の方針により「ニューバイタリティー活動」という新しい運動が発足して、その盛り上げのための事務局メンバーに任じられた。

そんな毎日が続く中で、職場懇談会の前に開かれる「職場会議」には必ず出席をして、みんなの声をくみ上げて発言をしていった。ある日の会議で、新入行員などに「日頃、不平や不満を話しているのにどうして発言しないの?」と聞いたところ、返ってきた答えは「ホンネを言うと上司から睨まれるので発言しない」と、労働者らしからぬ銀行員としてのホンネの回答だった。一宮支部で開かれたある日の「支部集会」で、二つの発言をした。ひとつはベースアップの要求において、35歳で役付き手前の資格

者とそうではない多くの平行員の間で、賃金格差が大きいので是正すべきであると発言。もう一つは、平行員と役務者(支店長代理)で社宅の広さが違うのはおかしい。平行員の子供が二人で、役務者の子供が一人や二人であった場合でも生活スペースが違うのは、子供たちまで差別しているとは是正を求めたのであった。

この支店でもバレーボールは健在。次長と得意先担当者1名が経験者であったこともあって地区優勝を一度経験。女子は、高校野球で全国大会にも何度も出場している岐阜県商業高校(県岐商)のソフトボール部卒業の行員が3名が配属されたため、男性陣も熱心に練習に参加して2年か3年連続で本部大会にも出場した。運動部に入っていた女性が配属されて随分と支店の雰囲気も明るくなっていった。

このような日々を送る中で、職場の行員からは「どうして脇田さんは主事(役務者=支店長代理資格)になれないのだ。ゴマすりでもなく仕事もきちんとやっていて、みんなの代わりになって言いたい事や意見を上司に言う人は主事になれないのか」や、職場委員や行友会の役員からもそれなりの評価を受け、各々の選挙の前になると推薦の声があがっていたが、いざ、その役員改選時期が近づくとその声はどこへやら。実態は支店長任命制が立ち切れない職場の支配体制だった。

支店長席と年に一度の面談(自己申告制度・・・一年間の目標と実績を項目ごとに自らに課す)では、これまで同様に「君の仕事ぶりは前向きに評価している。決して仕事上の評価では、君の思想信条については反映させていない」と断りを入れ、ボーナスでは少々のプラスアルファをつけ、決して人事部へ昇格推薦はされることはなかったのであった。

家庭生活では二人の子供も小学生になり、昭和54年の春からは学童保育所に入所し、学童保育運動に参加していくことになった。そしてこの頃には、三人目の子供が幸子殿の胎内に宿っていた。辛く長い寂しい一人っ子で育った私にはとてもうれしい出来事だった。

当時の学童保育所は民間のアパートの一室を借りての小さなスペースだった。今のように学童保育が公に認知され盛んな時代でもなく、マンションが多くあり共働き家庭がたくさんいるという環境ではなかった。名古屋市の助成金を受けるにも地域の区政協力委員などの役員さんの協力と援助が欠かせず、預ける親の発掘や募集、運営費用の捻出にも大変な労力を要した。「入所説明会」の案内ポスターを作ったりもした。指導員も専門的な知識や体験などを身につけた人材もこの頃は少なく、指導員の処遇も費用的に不十分だったため、日本福祉大学の夜学生のアルバイト頼りであった。

そんな中で、2年目には運営委員長として以降3期務めることになったが、子供募集や運営費の捻出、指導員の待遇改善、年2回のバザー開催、夏のキャンプ、運動会、学童まつりなどなど、仕事を終えてからの活動にも精力的に動いた。娘、息子も学童大好き人間となり病気などで学校を休むことなどは減多になかった。息子などは6年生まで頑張り、今でも忘れられないが小学校の卒業式にはただ一人、半ズボンで式に臨んだのを覚えている。

学童生活では、多くのことを学び体験もし、今では私にとっても子供たちにとっても良い思い出だ。私はバザーで「たこ焼き屋さん」の担当係りで腕をふるい、キャンプでは自然と触れ合う子供たちの逞しさに励まされた。女性指導員が岐阜の山育ちであったこともあり、カエルやバッタを見ると「おいしそう～」と言うようなユニークな人物の影響か、子供たちはキャンプでの食卓には焼いたカエルやバッタを載せて食べていたが、私には真似ができなかった。



西区内の学童保育所が中心となって主催した、「こどもまつり」での「お化け屋敷」は忘れられない。近くの緑地公園でテントをなん張りか立てて黒のビニールシートを覆い、葬儀屋さんに努めていたお父さんが、棺桶に入って気持ちの悪い音楽のテープを流し、子供が近づいてくると幽霊役になり、時々体を起こして「うらめしやー」と驚かせた。私といえば冷やしたこんにゃくを釣り竿にたらし、こわごわ通る子供たちの首筋や頭に触れたり、男親たちは役割を十分？発揮した。この「お化け屋敷」は、大盛況でテントの外には長い行列ができた。余談になるが、この時使った木魚（お寺さんが念仏の際に叩く仏具）が、後かたづけの際に、行方不明になり罰当たりなことをしたと悔やんだ。

冬場の学校の体育館での行事では、自慢の喉で広い体育館でもマイクも握らず肉声で子供たちに歌唱指導をしたこともあった。また、我が学童保育所には父子家庭や母子家庭の子供たちも何人かいて、なかには算盤塾に通いたい経済的にも大変な子供たちに、中学の時に少したけ経験した珠算部の副部長の気分で、我が家の子供部屋で算盤を教えることもあった。

やがて大津の両親も親父が体力的に大工仕事が困難になり、名古屋へ呼び寄せて3LDKのマンションに7人が住むという超過密状態の状況となった。そして、母親はこれまでの私たちの生活の厳しさを見てきていたこともあって、学校に行くまで3人目の子供を家で面倒を見ると主張したため、保育園に入るまではと妥協した。やがて保育園に通園する頃になるとこれまでの上の二人とは違って、「いやや！帰りたい！」と園の出入り口で泣き止まないという辛い思いを夫婦で味わった。

だが、保育園の運動会で親子でやった競技で一等賞を取ってから急に自信がついたのか、明るく保育園に通うようになった。きっかけとはそんなものかとつくづく。姉と兄の学童生活にも興味を持つようになり、行事の際には「私も行くっ！」と積極的に参加するようになっていった。次女の名前は「栄」、元気に明るく育っていくようにと願いを込めて付けた名前だった。やがて、嬉しいことに保育園の時とはガラッと変わって自ら積極的に学童に通ったのだった。

#### 4. 自慢の喉・声に異変が

これまでの富田支店や稲沢支店での大変な苦勞をした経験と、学童の生活で忙しい中にも充実した日々を送っていた昭和57年に入って、風邪も引いてないのに徐々に喉の調子がおかしくなってきた。イライラして精神的に落ち着かず、扁桃腺が微妙に腫れているよう状況が続き、発声するにも力が入り声を振り絞るといった状態が続いた。職場のトイレに行っては、買ってあった「うがい薬」で何度も何度も口をゆすいでいたが、改善する気配はなかった。そんな症状も、寝言や一杯飲んだ後のカラオケなどははっきりとした声が出ていた。

そんなある日のこと、新聞の下段広告の週刊誌に「最近ストレスによる奇病が発生！」という見出し記事が目にとまり、これは読まなくてはと思い買い求めた。その記事の中で、「心因性の発声障害が・・・」という言葉を見つけた。これだ！と思い、秋には近くの耳鼻咽喉科に週刊誌を持って診察を受けたが、異常はないとのことだったが症状はひどくなるばかりだった。国立病院の「心療内科」にも週刊誌を持って行ったが、「異常なし」と同様の診察結果だった。その後は何とかしたい、治すためにはと医師を探し求めた。まさに藁をもすがる気持ちであちらこちらの病院に助けを求めた。コーラス部で鍛えた喉、バレーボールで皆に鼓舞するため大声をかけてきた自慢の喉が・・・・。

そういった異常で悩んでいた頃に昭和49年7月、名古屋守山区にある支店に異動となったのであった。守山区には、他の都市銀行はなく東海銀行の支店もひとつといった立地条件で、公的機関の区役所、病院、学校、外郭団体や警察、守山自衛隊などもお客様であった。当時はまだ、公務員関係の給料は振り込み制度になっておらず、区役所でいえばそれぞれの課ごとにお金を詰める作業（1万円札何枚、5千円札何枚、100円玉何個と注文によってそれぞれをビニール袋に入れていく。袋詰め作業と言った）があった。給料日の前日に行うこの作業には、4～5名のパートさんも配置されて100袋ぐらいの袋詰め作業をした。また、10台ほどのATMには給料日や年金支給日を中心に大勢のお客様の列ができた。

さらに、振り込みや普通預金からの引き出しなどで、窓口で用事のあるお客様の列が交差するといった具合で、「いつまで待たせるんだ！早く処理せよ！」と、苦情の怒鳴り声が響き渡ることもよくあった。

そんな大変な窓口で配属されたが、また職場の雰囲気にも十分馴染めないひと月を過ぎた頃に、出納元締め（先に述べた公務員関連の給料現金の詰め込み、支店の受付・得意先係りとの現金授受やATMの支払い現金・入金現金の処理などのお金の取りまとめ）を担当していた女性の退職により、そのポジションに配置換えとなった。

ところがその出納係の元締めのある席の上には出窓が設置されていて、夏場には太陽の日差しがガラス越しに照りつけて大汗をかいての執務だった。夕方にほっぺに手をやると汗が塩になってザラザラで、舐めると塩辛かった。そういえば、前任者の女性も汗でお化粧が溶けて流れ、いつもハンカチで汗を拭いていたのを思い出す。

昼休みの食事を取った後、宿直室（そのころには宿直制度はなくなっていたため、仮眠室としてあった）で心身ともに疲れた体を癒していると、「ATMが現金不足で止まったので、補充したい」などで行内電話がかかってくる事も珍しくもなく、落ち着いて横になっている間もなかった。そのうえ内部担当の事務管理次長は、口うるさく店中に聞こえる大声で叱咤するといった、今でいうパワハラを存分に発揮する人物だった。この過酷ともいべき仕事が、より精神的にも肉体的にも体調の異常を増幅させる原因となっていた。

やがて、仕事帰りのバスに乗るとATM機のバックミュージックがどこからか聞こえてきたり、布団に入ってもその音楽が頭から離れないという症状も出てきた。声の変調が進んできたため、ある日の夕食後の団欒の際に食卓の下にカセットテープを置いて、その録音された声に愕然としたこともあった。

もう肉体的にも精神的にも限界と感じていた梅雨時に、そのカセットテープを持って名古屋大学付属病院分院の心療内科の担当医にテープを聞いてもらった。結果、「心因性の失声症」という診断を受けた。この頃には布団に入っても体がピクピクとけいれんを起こしたり、不眠が続いたりして気が落ち着かず、電話恐怖症にもなっていた。段々それらの症状が深刻になり、出勤するのが辛くなったり自殺を考えたりするようになっていた。

どうすれば良いのか悩んでいたところ、静岡銀行の組合仲間から「私も同じような声の出にくい症状で、東京の日本みどり会という診療所に診てもらって改善してきている。一度診てもらったら」というアドバイスを受けた。居ても立っても居られず、休暇を取ってその診療所に駆け込んだ。診断の結果は

自律神経失調症で、「心身共に興奮状態であり、直ぐに治療・休養しないとだめだ」と言われ、「心因性の発声障害」という診断書を支店長、内部担当次長と面談のうえ提出し、長期休暇に入った。

その診療所が運営する療養所を案内され、静岡県東伊豆八幡野の別荘地帯にある「伊豆健康センターみどり会保養所」というところで、転地療養に専念することになった。昭和59年10月のことだった。家族と離れて、幸子殿には仕事と家族の世話の一切切を任せなければならないことに申し訳なかったが、このまま自分が潰れてしまったらそれこそ大変なことになると考え、まずはこの病気を治すことが一番と割り切ることにした。

さすがは伊豆の別荘地、テレビなどにも登場した故大橋巨泉さんの別荘などもあり、売却物件はすべて温泉付きといった物件ばかりだった。保養所から海辺に下っていくと伊豆大島が見え、少し足を延ばすとつり橋を渡って城ヶ島海岸、山手には大室山と新鮮な空気と潮の香、目の保養など心と体を癒すには十分すぎるロケーションだった。

保養所には、全国からお年寄りから若者まで幅広く入所していて、糖尿病から難しい病名の人々が15人くらいの患者がいた。保養所に来てからはこれまで経験したことのない治療と療養生活が始まり、とにかく無我夢中に取り組んだ。朝、目覚めるとまずは「練功十八法」という中国・上海の健康体操から始まり、針や指圧を受けたあとには色んな健康器具が設置されていてそれらを体験する。食事は一日に二度、玄米食で地産地消の野菜と煮魚など、さすがに大好きな寿司や刺身とか肉系は一切食膳に出ることはなかった。ましてやラーメンやうどんそばの麺類もなく、これが何よりつらかった。当然おやつなんかも出る訳はない。

体操と治療のあとが朝食で、休憩の後には道場というかミニ体育館に集まり、時々診療所が講師を招いた健康に関する講義や実技を学んだりした。丹田呼吸法や股関節の矯正法などいろんなことを学んだ。お昼時は午睡などのフリータイム、別館の図書室には健康に関するたくさんの書籍があり、みどり会の院長馬淵先生の「自然治癒力・復活療法」や、九州大学名誉教授で日本心身医学会理事長なども務めた池見西次郎先生の「自己をととのえる」・「セルフコントロール」、森田正馬先生の「森田療法」などの書籍を部屋に持ち込んで読んだ。そして、夕食前には海岸に出かけてスケッチなどもし、夕食後は休息の後に医師や入所者と卓球などで汗を掻いたあと、入浴をすませベットに入り家族への手紙や日記を書いたりして一日を過ごしていた。

これまで経験したことのない「一週間断食」にもチャレンジした。断食は腸内掃除が主な目的であり、腸内のあらゆるところのヒダにくっついている宿便を体外に放出し、快適な腸内環境を作る。たしかに、断食後は頭の中までスカッとしたすがすがしい気持ちになった。時には会社の従業員が、団体でスピード断食といった3日間のコースにチャレンジに来られる光景が見られた。「一週間断食」はとても厳しく、下剤をかけて水分だけを取って胃と腸を空っぽにし、3日後には今日は何分粥、明日は何分粥と徐々に元の食事に戻していくといった調子だった。この間、テレビを見ていて思ったのは、どうしてコマーシャルってこうも食べるものの宣伝が多いんだと思った。断食を一緒にやった入所者たちと「なんでこうも毒になるものばかり宣伝しているんだ」と、お互い顔を見つめ合って苦笑していた。ここでの玄米食生活はこれまでの人生で体験したこともなかった。慣れると便通もよく顎も丈夫になり、噛むという力も向上すると言った具合で、もちろん自律神経の向上にも役立つというなかなか効果のあるものであった。そして、朝食の食膳には近くの製パン所で作られる「玄米パン」がとても気に入る。



時々我が家にも送ったものだった。あとで子供たちに聞いた話によると、自分がおいしいと気こいても「おいしいかあ〜」と好きになってももらえない我が家の雰囲気だった。

気温も空気も景色も良く、ゆったりとした療養生活が肉体的にも精神的にも安定して落ち着いた日々を送っていたが、12月に入るといったん退所して自宅に戻ることにした。というのも銀行員にとって師走は最も仕事が忙しくなり、残業も一番のピークとなる時であった。幸子殿も銀行員として、また3人の子供たちや両親の面倒などで大変な時期であったし、せめてこの時期だけでも家族のために家事の手伝いなどをしなくてはという気持ちにかられ、名古屋の自宅に戻ることにした。

名古屋駅に降り立った時、まず「臭い！」が一番の感想だった。伊豆の自然豊かな空気の良い環境に慣れ出していたため、車の排気ガスの匂いがこんなに臭いものとは気づかなかった。人間の慣れとは怖いもんだとつくづく思う。

家に帰った私は、次女の保育園の送り迎えから始まり、みどり会で学んだ食事づくりに取り組んだが、肝心の献立にする食材探しが大変だった。伊豆に原生する明日葉も今ほどにはスーパーにいない。こと左様一つの野菜を探すだけでも大変な思いをした。ご飯も玄米をメインするために圧力釜も購入した。これには子供たちの対抗が凄まじかったが、我が家の女性陣の便秘解消には大きな力を発揮したと思う。年末近くになると新年のおせち料理の準備もして腕をふるった。

あわただしかった12月を乗り越え、家族全員で楽しく迎えた正月を過ごし、1月の下旬には再び伊豆の保養所に戻ることにした。今回は体力的には自信を取り戻していたため、あとはいかに発声の障害を取り除くことができるのか、この病気からの出口を見つけるきっかけを求めた。「自律訓練法」という、いかに心と気持ちを落ち着かせ、リラックスさせるといったこの訓練で、人前で話す前に気持ちを整えるという意味でも役立った。

般若心経をどうすれば力を入れずにリラックスして自然体で読めるのか。何度も何度も毎日、発声具合を確かめるように続けた。みどり会では、「健康と長寿」という月刊誌を発行していた。私が投稿した文章は、「不安がないといえば嘘になる。苦しんでいるのは自分だけではない。人それぞれに苦しみや悩みながら今日に至っている。自分の病気を特別扱いにするな」であった。そして、幸子殿から何度かもらった手紙の中には、「長い人生の一休み。焦らず気長に頑張って……」という言葉を励みに。ストレスに負けず、セルフコントロールをうまくできる自分になれるようにと、図書室で本を読み続けた。そして、出した結論はやはり『あるがまま』に生きるということだった。

転地療養を含め8ヵ月の間、離れていた昭和60年の6月に職場復帰した。休む前の職場で、一ヶ月ぐらい慣らし運転・制限勤務(10時~16時)で働き出した。補助的な出納事務や自動機の担当者をやり、その後通常勤務に就いた。

これまで長い間、個人融資(住宅ローンや住宅金融公庫、カードローンやマイカーローンなどの個人客に対する融資業務)を担当していたローンマネージャー(支店長代理職)が定年近くになっていたため、その補助をやりながら業務を引き継いでいくということになった。銀行に入って20年、38歳にして個人融資は初めての経験となったが、この仕事がその後の銀行員生活を定年まで勤める土台となった。

ローンマネージャーが定年を迎え、融資の窓口へ座ることになった。何もかも真新しい仕事の内容であり、お客様と直接面談して業務をするのは久しぶりであった。個人のお客様の住宅ローンについての申

申し込みや返済の相談から始まって、住宅建設や販売の業者さんからの相談などを受けた。業者さんから苦手な電話での問い合わせがあっても出ないわけにはいかず、電話口に出ると、「まいど！浪花節のおじさん。脇田さんちょっと教えて・・・。」と言われたりもしたが、あまり気にせず「あるがまま」で対応した。

守山区には建売住宅業者や注文住宅業者などが多くあり結構忙しい思いをしたが、私的には忙しい方が気もまぎれるし、発声障害を気にしている余裕もなくその方が良かったかもしれなかった。この仕事はやっていて、やりがいもあり自分に合った仕事ではなかったかと思えた。お客様が来店していない時には、申し込み書類のチェックや事後処理、ローンの返済が遅れているお客への督促、ローンの取り組みのための準備などを行った。

申し込み受付から融資の実行までのほとんどが一人仕事であり、特に住宅金融公庫というのは専門的な代理店（住宅金融公庫の受託業務）の業務知識が必要とされていた。特に男性行員にはこの仕事は面倒くさい、覚えることが多いと敬遠されがちであった。分からないことがあると他の支店のローンマネージャーや、住宅金融公庫を担当する本部担当者にアドバイスを求めながら、その業務を身につけていった。特に高蔵寺支店のローンマネージャーのWさんには色々と相談に乗ってもらった。

まさか、その高蔵寺支店に転勤するとは考えもしなかった。2年ほどたった頃、その高蔵寺支店への辞令が出たのであった。守山支店同様に、ローンマネージャーのWさんも定年を迎えるということで私が後任となった。ひと昔は愛知県内のローンマネージャーの皆さんが新聞広告に写真入りで載っていたこともあったが、この頃から銀行の営業政策によりローンマネージャー制度が徐々に薄らいでいった。支店長代理職として雇用する賃金負担より、一般行員で仕事をさせた方が人件費の節約と考えたのではないか。

高蔵寺支店は春日井市にあり、名古屋のベッタウン「高蔵寺ニュータウン」として、開発途上にあつたため、住宅金融公庫や住宅都市整備公団などの一戸建て住宅やマンションなどの取り扱い物件も多かった。建設業者や不動産仲介業者も多種・多様に存在したため、守山支店よりさらに住宅ローンの業務が多忙な支店であった。そして、サラリーマンの宿命である転勤族も多く転居に伴う中古住宅の売買も盛んで、当然のように住宅ローンが発生した。多い月には2件3件と売主・買主・仲介業者・司法書士などと売買に立ち会い、住宅ローンを取り組んだ。また、ローンの返済利息軽減のために住宅金融公庫などの一部繰り上げ返済の申し出客も多く、約定返済日には私の前に20人、30人と行列ができるといった具合で、昼休み休憩も閉店後ということも度々あった。

当時の住宅金融公庫や住宅都市整備公団の融資金利は、今とは違って高金利時代であったため、銀行の住宅ローンへの借り換え相談なども急激に増えていった。そんな多忙な毎日であったある日、銀行のローン保証会社（顧客が保証人を立てる代わりに保証料を支払い、万が一返済ができなくなった場合、保証会社から代位弁済を受けるというもの）の担当者から電話があり、「今、どのくらいの申込件数を持ち処理状況はどうか、取り組みと事後処理にどれくらい日数がかかっているか」などの問い合わせがあった。愛知県内でトップクラスの取り扱い件数であることを担当者との対話の中で知った。

なにせ、申し込み相談から始まってローンの取り組みと対応するローンへの返済、抵当権の抹消までの何段階かの事務的な流れが必要であったため、一件一件が完了するまでは手が抜けない業務であった。手元には次から次へと、受け付けたお客様からの申し込み書類が山積みとなった。業務終了後には

それらをアイウエオ順に並べ、段ボールに詰めて金庫内へ搬入していた。店長席もさすがに私の仕事がパンク状態であったため、得意先係りの若手を私の補助としてつけてくれたのであった。他支店の住宅ローン担当者からは、急激に伸び続ける高蔵寺支店のローン取り扱い件数・金額について、その状況や処理方法や手順についてなどの問い合わせも多く寄せられて来た。

そんなある日、次長から「数か月で転勤だよ。次は昇格もある。今から引継ぎも準備しておくように」と、面談を受けたのであった。当時は主事代理(支店長代理)に昇格するのは平均35歳ぐらいであったが、40歳を過ぎてからこの声がかかった。その裏には壮絶な運動とたたかいがあったことを次の項で触れる。

## 5. 賃金差別との闘いと新しい労働運動の始まり

### 差別是正に立ちあがる

1970年後半になると、組合役員選挙に労学の仲間が当選することが至難の業となっていた。銀行の人事政策による恣意的な人事資格制度の運用・賃金制度により、職場の仲間をバラバラにさせ、ものを言う私たちには昇格をさせないといった「見せしめ」的な政策が推し進められたのである。それまでは一部役付きの労学の仲間はいたにはいたが、明らかに私たちを意識した「見せしめ」差別政策・徹底した労務管理が推し進められ、この頃には50才、40才台の労学の仲間が誰一人として昇格できなかった。労働者の権利を踏みにじり、人権を無視したきわめて異常な職場だった。

1960年から、全国地方銀行従業員組合連合会(地銀連)の仲間は、分裂・脱退の攻撃に晒されて解雇や遠隔地への配転などが行われた。残った組合員には、あからさまな賃金差別を受けていった。こうした攻撃により地銀連を脱退させられた労使協調の組合のなかで

「不当差別をなくす会」が発足して、賃金差別をはじめとするたたかひの経験が蓄積されて勝利の経験を作りはじめていった。

この地銀連から脱退させられた仲間たちは、「全国の地方銀行から不当差別と労基法違反をなくす会連絡会」(通称・全銀連絡会)を結成し、北は秋田、南は福岡銀行までの仲間を集めたのであった。1977年(昭和52年)5月に開かれた「不当差別と労基法違反をなくすたたかひの経験交流会」には、都市銀行、地方銀行、相互銀行、信用金庫を含め、136名が参加した。私たちの労学の仲間も参加して経験を学ぶこととなった。

そして、この年の12月には、これまでの「労働組合運動学習会」を発展的に解消して、「東海銀行から労基法違反と不当差別をなくす会」(通称・なくす会)を結成した。職場における数々の労基法違反の実態を明らかにし、労基局などに是正を求めていくことや、これまでの見せしめ的な労働組合運動による資格昇格差別、不当な賃金差別をなくすという目的を持って、あらゆる法が順守され、職場に働き甲斐のある明るい職場をめざすというものであった。

1978年6月には、愛知選出の田中美智子衆議院議員が、社会労働委員会で不当差別問題や住宅補給金の支給基準の男女差別の問題を取り上げ、新聞にも報道される事態となり、その後住宅補給金の規定が男女同一に改定された。12月には、愛知労基局に対して時間外手当の不支給(サービス労働)に



ついて申告した。私たちは、こうして公的機関を活用したり、銀行のサービス改善に対する要望や苦情など世論の受け皿となって、次々と運動を展開していった。

なくす会の仲間やこれまでの労学に参加していた仲間（東京・大阪も含む）の有志で、何度となく頭取宛てに「不当差別是正」の要請を内容証明郵便で送り、1982年（昭和57年）2月8日には、私たち13名で愛知労基局に対して、①時間外手当の未払い ②勤務記録表の書き換え強要 ③昼休み時間が規定通りに与えられていないなどを申告した。

また、全銀連絡会の仲間の支援を得て、会を結成して初めてという宣伝行動に取り組み、名古屋の中心街の伏見や栄で、緊張で手足が震えるのを押さえながら、勇気を出してビラを配布したり、マイクを握っての宣伝行動となった。

愛知における東海銀行の存在は大きく、「天下の東海銀行でこんなに法違反があるのか」と反響を呼び、マスコミも大きく取り上げたのであった。こうした運動の中でも、仲間たちは伊豆で療養していた際にも遠路見舞いに来てくれた。また、休業期間中の生活のための保険の手続きまでアドバイスを受けた。こうした仲間の気遣いに今でも感謝している。

療養からの復帰後には、私なりの個性と得手を生かし、やれることには精一杯の努力で運動を支えた。この間にも、銀行は人事部を中心に山田なくす会会長や豊谷事務局長などに対し、勤務店に出かけて来ては応接室などで事情聴取や査問的な扱いを行っていたのであった。私たちはこうした局面の打開策を模索した。

そして、私たちは名古屋、大阪の労働争議解決などに実績と信頼のおける弁護士を味方につけ、先に述べた「全銀連絡会」の事務局長であった甲賀氏も同席の上、半年間に渡って賃金昇格差別を解消させるための話し合いを重ねた。甲賀氏は勤務していた静岡銀行を中途退職し、全国の闘いを専従として経験の蓄積をしてきた生き字引的な存在であり、弁護士からも実践的な理論性と行動力に敬意を抱かせるほどの人物だった。その手腕を発揮し、私たちの争議が全面解決するまでしっかり支えてくれたのであった。裁判を選ぶのか、労働委員会を選ぶのかを深く検討した結果、これまで私たちの受けてきた賃金・昇格差別は、正当な労働組合運動に対する銀行からの「見せしめ・嫌がらせ」という不当労働行為を受けてきたという結論に達し、愛知県労働委員会に申し立てをするという選択をしたのであった。

そして、私を含め仲間の12名（のちに1名は取消）は立ち上がり、労働委員会へ申し立てをする段取りや、それぞれが分担して精力的に申し立て書類づくりを進めていった。私は同期の金子氏とともに、毎月の社内報に掲載される人事異動（昇格と転勤を掲載。この争議終了後には、なぜか社内報に載せなくなった。）と、年に一回発行される役務者名簿（有料配布）をもとに、同期・同学歴者の支店長代理への昇格の時期、未昇格者の実態の調査を担当した。その結果は124名中95名、ほぼ80%の行員が支店長代理、次長職に就いているのが判明した。残りの20%の中には私たちと、病気で休職の人や入院していた人もいただろうが、調査結果からも私たちが受けてきた見せしめ的な差別は現実のものとして裏付けされた。

また、労働委員会へ出すための資料を作りと話し合いの中で、全国の銀行労働者の権利を守る運動に対して、銀行が何を恐れ、組合を分裂させてまで不当な労働行為を繰り返すのか、執拗に分断と差別攻撃するのか明らかになった。これまでも述べてきた怪しい風や雲の正体がはっきりと見えたのであった。



1986年(昭和61年)12月20日、愛知県労働委員会に対して私たち11名は「不当労働行為救済申立書」を提出した。この日の朝は背広にゼッケンをつけた60名余りの全銀連絡会の金融の仲間、地元の中部電力をはじめとする争議団の仲間などと一緒に、東海銀行本店、県・市の庁舎前などで宣伝行動をおこなってから、労働委員会に申し立てをしたのであった。

労働委員会には、成瀬昇労働者委員(元愛労評議長)のお力を得て大きな会議室を用意していたが、地元の争議団の仲間や全国から駆け付けた総勢100名の仲間の見守るなかで申立書を提出したのであった。そして、そのあと「勝利をめざす総決起集会」が200名規模で開かれた。マスコミも朝からテレビで報道し、各新聞も一斉に大きく取り上げた。

そして、4月20日には審問が開始されていった。当日の朝は、北は秋田、南は福岡の全銀連絡会の仲間や地元の争議団の仲間とともに、東海銀行本店周辺で行った宣伝行動で周辺一帯は騒然とした雰囲気だった。

当時、地元企業の旭精機、大隈鉄工などの労働者の整理首切りは、東海銀行が債権者として背後で大きな役割を担っていたため、「東海銀行の争議責任を追及する共闘会議」が結成されて共同行動を展開するとともに、「東海銀行闘争支援共闘会議」が結成され、①東海銀行の横暴を許さず、サービス向上、国民に役立つ銀行を目指す。②銀行に働く人の権利を守り、賃金差別をやめさせ、職場に自由と民主主義を確立する。と会則を定め、労組・教師・業者・愛知の争議団・弁護士などによる勝利解決に向けての体制も確立された。

審問がある日には毎日のように本店前の宣伝行動や節目節目には、官公庁街での昼休みデモや繁華街の栄交差点からの本店までの抗議デモなどを繰り返した。当時を振り返って中谷弁護士は、「裁判所や集会、争議のある所には、どこへ行ってもあなたたちがいて、なくす会の旗があった。」と振り返る。こうした行動のなかで、「たたかひの歌」を作ろうという仲間のかけ声で作ったのが、私の歌詞と、曲は京都のひまわり合唱団の忠やんに依頼して「明日の勝利へ」が完成したのであった。

 黄色いゼッケンに身を震わせて 仲間の怒りを手渡すピラに  
働く誇りある職場をつくるため 今日を確かめ明日の勝利へ  (2番以降は省略)

総論立証(申し立てに至った経緯などの証言)では、わがメンバーのエースで京都からの兄貴分、豊谷事務局長から始まり三人が証言に立ったあと、申立人一人一人がこれまで受けてきた選挙妨害の事実、サークル運動への妨害、嫌がらせ、陰湿な差別的扱いなどを証言した。私たちの労学から始まった労働組合運動によって、働く者に幾多の労働条件の改善や労基法違反の是正を導き出したかななどを組み立て、「正当な組合活動とは」・「外形的差別として、同期同学歴者とどれだけ差別されているのか」・「銀行の不当労働行為として組合役員選挙の妨害」を三つの争点として、これまでの具体的事実を証言したのであった。

私の個別立証には、同じ京都出身で四日市公害裁判をきっかけに、現在では名古屋における「秘密保全法に反対する会」の共同代表でもある中谷雄二弁護士が担当してくれた。

入行以来どんな仕事をし、どんな活動をしてきて差別や不当な扱いを受けてきたかを保存してあった手帳へのメモ書き、店長席との人事評価面談での書類のコピー、組合の議事録などを参考にして組み立てる準備作業を記憶に基づいて整理していった。

中谷弁護士が体調不良で、「先生は今日は調子悪くお帰りになりました。」などで打合せが流れることもあった。そういった場合は、自分で審問の証言・銀行側弁護士への反論などのQ&Aを自分なりにつくり、先生との打ち合わせの際には叩き台というより叩かれ台にして進めていった。この経験はその後の組合活動での団体交渉や、後輩たちの裁判での弁護団会議、法廷でのやり取り・駆け引きに随分ずいぶん役立った。

一方で、組合役員選挙の妨害や組合活動の実態を証言してくれる人を捜し求めたのであった。そのなかで、富田支店時代の組合役員選挙妨害の事実を「陳述書」という形で協力してくれた鈴木氏の証言文章を書かないわけにはいかない。鈴木氏は銀行を中途退職していたため、年賀状にあった静岡県某所に訪問して、私たちの争議の経緯を報告して協力を求めたのであった。

『1975年2月、三重支部組合代議員選挙にあたり、私は脇田氏が立候補し、推薦いたしました。ところが2月17日の立候補締切日に得意先係の担当代理ご呼ばれ、支店長が料理屋で待っているから一緒に行こうと言われました。支店の近くの小料理屋へ行くと、当時のK支店長が水割りを飲んでおり、脇田氏の推薦を取り消すように言われました。私は脇田さんに推薦をすと言ってあるので了解を取らないと即答はできない。これから脇田さんの所に行ってくる。と言ってそこを出ました。当時桑名に住んでおりましたが、地図を片手に居宅を探し、夜の10時過ぎに訪問し、支店長との話の状況を伝え推薦取消を頼みました。以上の通り相違ありません』

この陳述は、いかに銀行側が私たちが嫌悪し、妨害してきたかを如実に暴露させた。この陳述書は労働委員会の委員に大きなインパクトを与え、私たちの闘いを勝利させる要因のひとつとなったのである。今、あらためて鈴木さんに感謝しておきたい。

だが、証言席に立つというのはいくらQ&Aで武装したとはいえ、とてつもない緊張する場で、自分の声で十分に証言できるかが不安であった。当日の中谷弁護士と昼食をしながらの打合せの席で、「先生、緊張して声が出なかったらどうしよう？ 緊張緩和薬にビールの小瓶を飲んでもええやろか？」と問いかけ、先生の上承を得て臨んだのであった。

私に対する銀行側証人の一人に地区のバレーボール大会で、セッターをやってくれたりして、そんなに私を嫌悪するような人物でないと思っていた同じ稲沢支店の事務管理次長が証言席に立ったことはショックだった。そして、よくもまあデタラメなある事、ない事を述べてくれたもんだった。それも小さな声で、申し訳なさそうに……。

他の申立人にも、銀行側は取締役や人事部次長、各申立人の当時の支店長、次長などを次々と証人として出席させてきた。その証言内容はひどいもので、ちょっとしたトラブルを大きく誇張したり、ミスが多かった、他の行員と比べて成績が悪かったなどと、いかにも他の行員と比べてダメ行員だったというイメージの証言に終始した。そういった銀行側証人のデタラメ証言には、傍聴席や他の申立人から抗議の声が飛んだり、余りにもお粗末な証言に失笑を買ったりで、労働委員会の委員までもが苦笑いをするような場面も多く見られた。



そういった意味では、銀行側証人も支店や本部ではいかに職権・権威を放っていても私たちと同じように緊張もするし、私たち同様に一人の弱い普通の人間に違いないと痛切に感じた。また、そのような証言をさせられた事に対して、気の毒な役回りをさせられたと同情する。

審問は、銀行側と交互に証言席に立って証言と反論をするといった方式が採用されて進められたが、絶対に勝てるという確信はなかなか持てなかった。そこで私たちは、労学のリーダー的な存在であった二人の役務者に証言に立ってもらうことになった。二人は役務者になった時の人事部とのやり取りについての経緯や、役務者として部下の人事考課をつける立場にあったため、その状況や考えを証言してもらった。

京都から出席してもらい証言席にたったSさんは、「銀行は、私がどんな気持ちで証人に立っているのか、分かっているのか。私は銀行に頭を下げたのです。申立人たちは頭を下げなかったのです」と心からの叫びを発した。また、豊橋で次長職まで経験したOさんは、「人事考課に恣意的な要素が入り得る」と、申立人たちが特別扱いを受けていたかを証言してくれた。この二人の勇気ある証言を受け、やがて結審の日を迎えることになっていく。

1991年(平成3年)4月から始まった和解交渉は、5月の第3回目で労働委員会の努力にもかかわらず、銀行側の抵抗により交渉が決裂し、7月3日に最終陳述をすることとなった。264ページに至る最終陳述書を提出し、東京の羽鳥さんが陳述に立つことに決まった。羽鳥さんの感動的な陳述に、傍聴者や代理人弁護士、申立人とその家族からもすすり泣きの声が漏れた。

そして労働委員会に対しては、「早期救済命令を求める要請署名」1,234団体、22,274名分を提出した。実に4年7か月争われてきた労働委員会の手続き(準備期間を入れると約10年)は完了し、あとは命令を待つということになったのである。

そんな時、長年の間私たちに怪しげな暗雲と風が、今度は銀行側に突風の如く吹きつけるという事態が発生した。労働委員会手続きの完了した月の7月27日、東海銀行の不正融資事件が発覚して、マスコミは連日のように大きく一面報道したのであった。

折しもバブル絶頂期であり大手銀行は本来の社会的使命を忘れて、競うように儲かる融資に走った。そういった収益第一主義政策の下で住友銀行、富士銀行、日本興業銀行と相次いで不正融資事件が発覚して世間を騒がせた。

地元東海銀行の創立50周年という記念すべき時期に起こったこの事件で、大きく流れが変わったのであった。テレビでもおなじみの経済評論家の佐高信さんを招いて、9月に開催した「銀行・証券問題を考えるシンポジウム」には、不正融資事件報道の直後でもあったため取材陣も大勢詰めかけ、夕方のテレビニュースには豊谷事務局長がテレビ画面にアップで映ったり、なくす会への問い合わせなどが続いた。東海銀行の経営姿勢が大きく問われる事態となった。

この間にも、私たちは救済命令を勝ち取るための行動を根気よく続けていった。ペアを組んで、取引先である大口の株主や愛知県庁の関係部署(東海銀行は指定金融機関であった)に、「争議の早期解決に向けてお力をお貸し願いたい」と要請のオルグ活動をした。

最終局面では、支援共闘会議などの協力を得て、東海銀行の本店をぐるりと取り囲んだ。参加してくれた支援者にはあらかじめ用意した、おにぎりとお茶を配り、「東海銀行は社会的責任を果たせ」「争議の早期解決を」と訴えた。

さすがにこの行動には本店の上層部も堪えたらしく(トン汁の匂いに負けたのか)、「頼むからそれだけは勘弁してくれ」と、慌てふためき本部の役職者が飛び出てきたのであった。今でも当時の支援者と顔を合わす機会があると、おにぎり・トン汁騒動が頭に残っているようで昔話として話題になることがよくある。

そうしたいくつかの解決に向けた運動を経て、双方の弁護士による争議解決への話し合いが動き出した。10回に及ぶ協議の結果、改めて労働委員会と和解の手続きを取ることが合意されたのであった。

生涯忘れることのない、さわやかな秋晴れの1991年11月11日、一人当たり700万円の和解解決金が銀行から提示された。私たちはみんな協議した結果、納得して和解協定書に調印することとなった。遂に「東海銀行に勝った!」のであった。私たちは直ちに記者会見を行い、翌日の各新聞には大きく報道された。なにせ、一万二千人の従業員を要する都市銀行で、たった11人の行員が勇気を持って立ち上がった争議が勝利したんだ。

正直な気持ち、「あ〜終わった。我ながらよう今日までしんどい運動と活動を続けてきたなあ〜。よう勝てたなあ〜」としみじみと思った。

息をつく間もなく、これまで支援頂いた団体・個人の仲間の皆さんへの報告とお礼などのあいさつ回り、そして勝利報告集の準備や勝利報告集の作成作業が待っていた。私は報告集の作成委員会担当となり、報告集に向けての冊子の作成に向けて実務を担っていった。私の案のタイトル「働く喜びと明日に誇りを」が採用されて、これまでのピラ、チラシ、なくす会の機関紙、支援共闘会議のニュース、行動・活動を撮った写真を整理して70ページの冊子を作り上げることができた。その冊子の各申立人の「家族からのメッセージ」という項で、幸子殿のメッセージを書きとどめることにする。

#### 『もう一つの闘いとも闘い続けたお父さん』

なくす会の結成において、お父さんたちがそれぞれに決意した頃、我が家の1歳だった三人目の娘も今11歳(当時)で5年生となる。長い道のりだったなとしみじみ思います。

やると決めたら何事も一杯ぶつかっていく夫ですが、この間仕事の中でもなくす会・地労委の闘いの中でも、もう一つの自分との闘いがありました。声が出にくいという歯がゆさ、話す事が相手に伝わらないもどかしさに悩み続けたのです。この発声障害の治療においては、仲間の方々の本当に暖かい助言と援助をいただきました。そして、今でも発声障害と付き合いながらの活動ですが、自分なりに納得できる勝利だったのではと思います。

子供たちも地労委の傍聴に行った頃は、あまり関心を持っていなかったけど、正しいと確信していることに正面からぶつかっている人たちの姿を忘れないでしょう。11人の持ち味を生かした活動と力強いたくさんのご支援で、この勝利解決となりました。ありがとうございました。

そして1993年4月には、是非これまでの闘いを振り返って本を作ろう、出そうという声が上がると、労働委員をお願いした成瀬昇さん(故人)や甲賀さんにも執筆に加わってもらい、11人も分担をして宮崎雄介さん(元愛知県高等学校教職員組合委員長)に編集のお力添えをいただき、「頭取が勝てなかった11人の銀行員・東海銀行30年の記録」を発刊した。本店近くの丸善書店に立ち寄ると、「今週のベストセラー」と宣伝チラシが貼られ、山のように積まれていた。が・・・何故か数日後には一冊

も置かれていなかったという珍現象が発生した。あの様に積まれていた本がいつべんに売れた？おそらく銀行が買い占めたのではとの憶測も飛んだ。その2年後には第2刷も発行したのであった。私が売った一番目の購入者は、労働委員会に申し立てしたことや和解で解決したことなどを報告し、本を出すことになったと話をして、**「俺が一番に買うからな」**と言ってくれた当時の守山支店長だった。

和解後、一定期間において和解内容に沿って、11人のうちの多くは支店長代理に昇格していった。昇格しなかった仲間は、退職時まで昇格者と同等待遇として扱われた。私も高蔵寺支店勤務時に勾わされていた**「次の転勤で昇格があるから」**との言葉の通り、大府支店に転勤して間もなく、ローンの担当代理に昇格したのであった。

ずいぶんとバレーボールの話から遠ざかっていたように思う。発声障害の治療や伊豆の療養から戻って(この間はお休みでした)、しばらくしたある日の事、ご近所の学童仲間のTさんから**「PTAのバレーボール大会というものがあり、脇田さんも一緒に練習をやらない？体のためにも精神的にも発声障害を和らげるのに良いと思うよ」**と声がかかり、喜んで参加することにした。争議での運動の準備・会合などで日程調整や時間の確保も大変だったが、よほどのことのない限り参加していった。

ところが、このバレーボールのルールがまた変わっていて、名古屋独特のルールで6人制は6人制でもコートの中は男性は2人、女性が4人で試合中に2人が義務交代。男性には厳しいルールが適用され、サーブはアンダーサーブのみ、片手攻撃はダメ、男性の角度があつてスピードがある攻撃もダメで、ブロックもだめというものであった。相手チームの弱い所、取りにくい所へのパスアタックだけという、まるで**「女尊男卑」**の混合レクリエーションバレーという独特のものだった。

誘ってくれたTさんの旦那さんがセッターを学生時代からやっていたため、私のジャンプ力を見抜いてくれ、クイックジャンプでの攻撃の練習を積み重ねることになった。当時男性は、40歳からの出場資格だったため慣れないバレーのルールを体に覚えさせるのに苦労した。なにせ、ボールが床に落ちるまでは1度しかボールに触れることができないため、自軍に入ってくるボールをパス攻撃に繋げるには、攻撃するまでボールを触ることができない。しかも4人が必ずボールに触らなければならず、2度触ると反則を取られるという厄介な代物だった。

いよいよデビューする舞台がきた。1年目の名古屋市西区大会は残念ながら決勝で敗れる結果となった。その後、他区への練習試合も重ねていった。そんな時、中区のチームに70歳くらいの背の高い男性がいた。PTAの大会には変だなあと思い、そのチームの方に聞いたところお孫さんがこの学校の生徒で、PTAの役員をやってみえるから出場資格はあると聞かされた。それを聞いて、**「よし！この人が目標だ。自分も70歳までバレーを続けよう」**と。これが励みと目標となって現在まで続けられている。

そして、デビューして2年目、3年目と2年連続して見事に西区優勝を果たし、名古屋市大会に出場できた。4年目は、残念ながらベスト4をかけた試合中、ジャンプした際に両足がつってしまいそのまま床に落ちた。つった経験のある人は分かると思うが、別名こむら返りといわれる筋肉の痙攣で、痛さのあまり油汗は出るわ、ぐっとこらえて息を止めるわ、そのうち腹の筋肉や背中筋の筋肉まで痙攣を起こすという症状になる。夏の暑いときに行われる大会であり、急激な筋肉の酷使と汗のかき過ぎによる塩分不足が原因らしいが、いったん症状が出ると治まるまでに時間がかかり、ゲームに復活することができなかった。



何年目だったかは忘れたが、当時はまだ毎週土曜日が休日ではなかったため、早退の届けを銀行に出し、12時の閉店を待って仕事を終え、呼び寄せていたタクシーの中で着替えをして会場に向かったが、すでにチームが試合に出ているため出場できなかったこともあった。また、肉離れを起こして1週間ぐらいはマツバ杖をつきながら、タクシーで出勤したこともあった。支店長からは「やってしまったか」や、お客さんからも随分冷やかされた。そうした辛くも痛くも楽しい思い出がたくさんある。

今も、小学校の特活室には当時の優勝した時の盾が展示されている。そして、今では故人となったセッターのTさんの着ていたジャージとOBチームのユニフォームを遺品としていただき、練習の際には大切に着用している。今はそのPTAのOBチームのメンバーとして参加し、年に1度の大会にもチームの世話役として実行委員会に出席して試合にも出ている。

#### 誰でも一人でも、パートでも加入できる労働組合

争議と並行して、全国レベルで労働問題に精通した弁護士を巻き込んだ協議が綿密に進められていた。私たちの争議の起点ともなったように、ユニオンシップ制（企業別組合、職員＝組合員で組合費も給料から天引きされる）を取る多くの銀行は、組合の中央執行役員は第2の人事部的役割を担い、委員長や執行委員は任期満了後、人事部長や役員への道が開かれていると言った具合である。職員の労働条件改善や賃上げなどの不満や要求の実現に力を入れるどころか、職員の要求や不平不満を押さえ、逆に経営者と一体になって収益向上や効率化、人員削減などを協議するといった状況であった。

本来の組合の役割のひとつでもある「企業経営のあり方に対するチェック」といった機能を果たしていない。東海銀行ではこれまで述べてきたとおり、支店長の多くは支店長代理であり、労働組合の団結強化を図るどころか、組合の役員選挙で妨害をしたり経営側と一体になって、見せしめ的に仕事や賃金などの不当な差別をする役割を果たしてきた。

こうした事態を脱却するためにはどうすればよいか、職場の不平不満の声を聞き、働き甲斐のある生き生きとした職場をつくるために、どのような労働組合を作れば良いのかが検討されていたのであった。そして、これまでの企業別の組合から、新しく産業別の誰でも一人でも加入できる新しい労働組合を結成すべく模索していった。

しかし、大きな壁であるユニオンシップ制は従業員＝組合員であり、下手をすると銀行を首になることも視野に入れておく必要があった。私たち夫婦もその事を十分に頭に入れて決断しなければならなかった。なにせ首を切られたら、たちまち路頭に迷うことになるということも考えざるを得なかったからである。夜遅くまで二人で話し合った結果、覚悟を決めて新しい組合に加入することを決意した。

1991年2月16日、ついに「ひとりみんなのために みんなはひとりのために」というスローガンを掲げて、全国の銀行、信用金庫、信用組合、労金、農協、そしてそれらの関連企業、パート、派遣労働者および出向者など、全ての銀行産業に働く労働者が、「それでもひとりでも、パートでも加入できる、個人加盟の労働組合「全国銀行産業労働組合」（略、銀産労）が誕生した。2月18日には『ユニオンシップ協定による解雇は無効』という最高裁の判例をバックにして、全国一斉に10の銀行に対して、組合結成の通知と団体交渉の申し入れを行ったのである。この組合立ち上げについての一連の動きを「赤穂浪士の吉良邸への討ち入り」を連想した。ムチャクチャに緊張したなかにも胸が躍った。どこの銀行やその企業内組合にも、組合結成の動きを察知されず見事討ち入りを成功させた。

そして、なによりも無事に我が夫婦や他の同時加入した仲間夫婦が首を切られることはなかった。結成2年後には170名を超える組織となっていた。

その後2009年9月には、銀産労と全国金融一般労組・北海道金融労組・北陸信金個人加盟労組・近信労（近畿の信金・信組の労組）の五つの金融機関の個人加盟労組が一体となって、「全国金融労働組合連合会」（略、金融労連）を上部組織とした約200名の「全国金融産業労働組合（略、金融ユニオン）」が発足した。

当初の銀産労では発足時に分会長、そして愛知県支部長、東海地方本部委員長、中央執行副委員長と年を重ねるごとに重責を担うようになっていったが、それぞれのポジションでそれなりの役割を果たしてきたと思う。

しかしながら残念なのは、ともに労働委員会でのたたかいや銀産労の立ち上げなどを一緒に進めてきた仲間たちが、余りにも早くあの世に旅立っていくことになるとは思ってもいなかった。私の兄貴分であり、常に今日までの運動のリーダー的存在であって近い将来の銀産労の委員長候補でもあった豊谷さん、東京からひとり立ち上がった羽鳥さん、不当差別をなくす会で大変な会長役を務めてくれた山田さん、同じく副会長のランナー岩槻さん、たたかいの軍師・参謀役だった竹内さんと次々と亡くしていった。自分の生涯でかけがいのない戦友たち。私があこの世に到着したら、「あーでもない、こうでもない。なに言っとるだ」と激論を交わしながら、うまい酒を飲みたいなあと思う。

そして、金融業界は次の時代に進むことになる。バブル期の変額保険や不動産投資などの提案融資などで相次いだ反社会的な収益第一主義による不祥事件や不正融資。バブルに狂奔した大手銀行をはじめ、それらに突き進んで行った銀行は必然的に不良債権処理問題を抱えて経営危機を迎えていくことになる。

政府の政策方針により1996年11月には金融ビッグバンが宣言され、金融分野全般にわたる規制緩和が推進された。1998年10月には特別立法により、国民の血税による不良債権処理が進められ、それらの銀行は経営危機を免れた。1998年12月には、銀行窓口での投資信託が扱われるようになる。そして、大手金融機関は2000年に入ると経営体力の立て直しと再建をめざして、次々に合併劇を展開していった。

今では、もとの銀行の名前は何だったかも国民の間には分からなくなっているが、日本で一番長い名前の銀行「三菱東京UFJ銀行」は、元三菱・東京・UFJの各銀行の合併だがUFJは元三和と元東海の合併銀行である。三和と東海の合併前には、やれ協和銀行だ、埼玉銀行だと合併のお相手を巡って騒動があり、新聞・週刊誌はその合併劇に輪をかけたごとく随分と賑わしてくれた。

幸か不幸か、私が東海地方本部委員長の時代に重なっていたため、東海銀行と三和銀行との合併に反対する要請書づくりに大変な苦勞をしたことを思い出す。何度も組合員と討議を重ね、練り上げて完成させ、名古屋市庁舎の中にある記者クラブに要請書を持って記者会見すべく訪ねたこともあった。

2003年10月には、UFJ銀行が金融庁検査での妨害行為について東京地検特捜部に刑事告発され、2004年10月に強制捜査を受けたりと波乱含みの展開の中で、最終的には2005年10月に三菱東京との経営統合に至ったのであった。

しかしながら、合併劇の裏で行員は、システム変更による事務手続きの変更・使用機器の変更などによる度重なる研修で、時間外労働は大幅に増加していった。

長年の企業文化、職場で使う一つ一つの言葉・用語の違い、扱う伝票の書式などなどシステムの違いは想像を越えた。しかも私たちの場合は、旧三和銀行の文化と職場の執務・システムの流れに合わせる事と慣れることから始まり、やっと慣れた頃には再び三菱・東京のシステムに合わせなければならなかった。

また、お客様には店舗の統廃合による戸惑いや、通帳やキャッシュカードなどの利用の変更点での不安や混乱を招いたのであった。新銀行がスタートするたび、研修を積み重ねてきたにも関わらず事務処理や手続き面での処理時間の影響で、窓口にはお客様がロビーに溢れるわ、待ち時間は長くなるわで超多忙となり、その結果は窓口の行員や後方事務方の昼休み休憩時間が昼休みではなく、夕食時間になったりと散々な思いをした。

私たちの団体交渉では、「顧客第一の経営を」「店舗の統廃合はお客様本位で進めよ」「昼食休憩時間を取らせよ」「本部応援体制を確立せよ」「サービス労働の排除」など、交渉のテーマは多岐にわたった。

いつの世も、どんな社会や企業でも「時の流れ」の犠牲になるのは民衆(国民)であり、そこに働く労働者たちだどつくづく思い知らされた合併劇だった。

#### 6. 銀行員としての集大成・最後の職場

支店長代理となり勤務した大府支店では、UFJ銀行から三菱東京UFJ銀行への合併と二度にわたる合併劇を体験した。システム変更から事務手続きの変更などで苦勞もしたし、お客様への対応でも慣れるまで大変な思いをした。併せて労働組合の活動と、公私ともに色々な経験させられた職場となった。

そんな支店で主事から支店長代理へ、そして専任行員へと約10年間をこの店に勤務し、60歳まで個人ローンと外貨両替、海外送金、貸金庫の業務を行員1名とともに職務を担当した。それよりなによりも、入行以来この年まで出向もせず、関連会社にも転籍させられることもなく過ごせたのは、私たちの労働組合の存在があり、組合員でいたからこそ勤務できたと強く感じる。

地区担当の部長や当時の支店長は、私に一目を置いていたというか私の動向を注視していたと思われる言動がある。UFJになった際、合併劇の影響もあって合併に関わるコストが増大し、大幅な収益悪化で一時期ボーナスがゼロ支給となったことがあった。その際に部長は、「脇田氏、銀産労はどう主張しているのか。どのように考えているのか。ピラがあったら見せて欲しい」と言われたことがあった。また、職場の行員にもこの銀産労の主張を書いたピラを配布したため、当時の支店長からは居酒屋さんで「脇さん、この銀産労のピラようできとるなあ。その通りだと思う。母ちゃんもそうだ、そうだと言っている」などの声を聞いたこともあった。

60歳になると退職するか、もしくは嘱託職員として賃金の減額や職位、職務など大幅に労働条件が変更されても働くかを選択すべき時が来た。しかし、当時の年金支給開始年齢は63歳となっていたため、私は新しい制度として発足した再雇用制度に乗り、一年契約の嘱託契約書に迷わずに署名・捺印をし、3年間勤務を継続することにした。



団体交渉の際に聞いた当時の人事部の話によると、なんと嘱託契約者の第一号だったようだった。要するに、出向者として関連企業や取引先企業へ転籍するか、そのまま退職者となるかであり、60歳まで銀行本体に勤務し続けた人間はいなかったということである。

60歳を少し過ぎた頃、この制度により異動となって名古屋栄にある旧東京銀行の店舗ビルにあった名古屋ローン業務センターに配属された。ここには、今までローン業務や住宅金融公庫受託業務など、受付業務から事務的な相談で大変お世話になっていた職員が大勢働いていた。営業店時代には電話でのやり取りがほとんどで、声しか聴いてなかった面々に感謝の意を込めて挨拶することができて嬉しかった。相手側も同様であったのか、初対面とは思えず親しみをこめて接することもでき、職場の雰囲気や環境に直ぐに馴染むことができた。担当した業務は住宅ローンの年末調整や確定申告の際に、所得税控除に使用する「残高証明書」の発行業務が中心であったため、これまでの職務経験が十分に生かせることができた。

なにより自宅から職場までの勤務時間も過去最短距離で、平常は残業もないため6時前には我が家に帰れるといったありがたい職場だった。長年の間、各勤務店への通勤時間から比べるとはるかに短縮されて申し分のない快適な職場だった。そして、多忙となる11月前には派遣会社から10人~15人のスタッフも職場に配置され、職務内容についてのレクチャーや、業務内容のマニュアル作りも楽しく、私には持ってこいの職場だった。

コミュニケーション作りはお手のもの。時には厳しく、時にはジョークも交えて働いてもらうことができた。お花見シーズンになると、センターの職員や派遣社員に回覧版を作って参加者を募集し、有志で事前に串カツやお寿司、つまみを用意して出かけたもんだ。

今でも、当時派遣で働いていた数名の女性たちとメール交換や年賀状のやり取りもあり、「結婚しました」「赤ちゃんが生まれました」「海外で生活しています」などなどの情報も寄せてくれる。

楽しく快適だった3年近くはあっという間に過ぎた。63歳になる退職日の前日の送別会は、センター職員有志と派遣会社スタッフたち30名近くの参加で、大いに盛り上げてもらった。職場を去る最後の日には、所長のメッセージ「長い間ご苦勞様でした。独特の温かい周囲への気配りと業務に対する熱い気持ち、色々と学ばせていただきました。花見をはじめとする飲み会の企画、『好きこそ・・・』とは言いますが、マメさにも驚かされ、楽しく参加させていただきました。・・・持ち前のバイタリティーをなくさず、明るく楽しい生活を続けられますようお祈り申し上げます」をはじめ、多くの職員・派遣の皆さんから思い出に残るメッセージ入りの素敵なアルバムを贈呈してもらった。こんなに気持ちよくやりがいを持って仕事のできた職場は、45年の銀行員生活で初めてだったし、我ながら有終の美を飾れたと満足している。

## 7. 妻が「うつ」になりまして

退職を機にそうは長くはないであろう残りの人生を、どう過ごすかを夫婦で話し合った。これまで互いに忙しく、バタバタとした人生を過ごしてきた。そこで、バタッと急に何もなくなり足腰が弱ったり、痴呆症などに向かうというのはまだ早いと思ったからだ。そして、世の中には自分が少しでも何か役立てることがあるのではと、あれこれ考えた末に夫婦揃ってシルバー人材センターの申し込みをすることにした。センターでの面接の際、『特技や技術、何ができる、何をやりたい』などの適正をアンケー

トがあった。私は家のかたづけ、洗濯、掃除、調理仕事から始まって、多種・多様の問いに〇をつけたところ、面接官が「男性でこんなに〇をつけた人は初めてだ」と驚いていたのが誇らしかった。長い共働き生活や学童生活などの経験がこんなところで役立つとは・・・。

最初は名古屋城にいくつかある櫓の案内ガイドの仕事だった。数人の会員の人たちとその建物の歴史や「石落とし」などの構造物の説明をしたり、観光客の出入り口でのスリッパ揃えの仕事で、それなりにやってはいたが、会員間の人間関係に不快感を覚えた。もっと自分を生かす仕事がしたいと考え、他の仕事を模索した。センターを利用する依頼者に感謝され、自分も体を動かす喜びを感じられる仕事はないものかと、除草作業を選択して現在に至っている。今年でこの仕事も6年目を迎え、夏場は熱中症との闘いだが、今ではご指名も多くやりがいを持って続けている。

ところが、今から3年ほど前から愛妻に異変が発生した。私が布団に入ってひと眠りして目が覚めると、愛妻は敷布団の上に座り込んで夜の2時、3時頃まで寝付けならしく、何やら考え込んでいる様子で溜息ばかりついている日々が続いた。聞くと知人でひとり住まいのお年寄りの今後の身の振り方の心配から始まり、息子夫婦の共働きと孫たちの生活上の心配や、今後の私たちの生活などの不安などが頭の中を巡り、寝付けなれぬことだった。

そのうち、知らない間に私のバレーボール大会役員用で貸与されているジャンパーや髭剃り機の充電器、ヤマダ電機の割引チケットなどが相談することもなくゴミ処分され、さらには妻自身名義の定期預金を解約して、普通預金に振り替えられていたりしたことも分かった。あれだけ毎日忙しくも明るく元気に張り切って、マイカーを運転しながら産直野菜、産直の肉、魚などの配達や、絵手紙サークル、ダンス教室などと走り回っていた。一時は医療生協でデューサービスの送迎車の運転手などもやっていた彼女。

東日本大震災での福島原発事故の後から始まった、関西電力名古屋支社前での毎週金曜日の抗議行動にも彼女に誘われて参加し、時には東京での集会、福井県での集会なども「お父さん、どうする？何か用事ある？行こうよ」と、即座に決断して二人で出かけていた彼女だったののである。

睡眠不足も手伝い、朝は起きづらく体も重たいらしく辛かったようだった。そして、そうこうしているうちに、喉がヒリヒリして口が渇く、舌に赤い粒々ができる。おしっこや便がなかなか出ないなどと症状を訴え出した。なによりもショックだったのは、妻の兄貴が亡くなり、葬儀で棺の中の兄貴といよいよお別れという時に、周りの兄弟・親戚が涙を浮かべてお別れするが、彼女の目からは一滴の涙も出ていないのを見たことである。

毎日ちゃんと食事を取っているのに体重も段々と減ってきて、10キロ以上も痩せてしまった。膠原病じゃないかしら、糖尿病と違うだろうか、体のあちらこちらの具合が悪いと言っては検査を受けに出かける日々が続いた。血液検査だ、CT検査だ、レントゲンだと病院に通う回数がどんどん増えていった。そして、最後に行きついたのが「うつ病」だった。

そんな状況が続いていたある日の真夜中、私が二階のトイレに入っていたら、階段でドドドッともものすごい音が響いた。ビックリして、トイレの中から「どうした？大丈夫？」と声をかけたが、返事がないので急いで用を足し、慌てて階段の下を見下ろすと失神して廊下に倒れていた。私が二階のトイレを使っていたため、下のトイレに行こうとして階段を踏み外して滑り落ちたのだった。寝る前に睡眠導入剤を飲み、ちょうど薬が効いている時間帯であったために意識がはっきりしていなかったのであろう。

ほっぺたを叩いても耳の傍で大声を出しても反応がなく、気を失ったままだった。「ええっ！まさかと」と焦った。そのとき咄嗟に、保健委員として防災訓練で講習を受けた心臓マッサージが頭に浮かび、思い出しながら試みた。両手を重ね合わせて、胸を押さえて「フッフ、フッフ」と呼吸をしながら「おい、しつかりせいよ。息吹き返せ」と、何度も繰り返した。幸いなことに、何度目かのマッサージ中にフーッと息を吹き返したのだった。

「大丈夫か?」「どこを打った?」「痛いところはないか?」と声をかけたが、まだ意識が朦朧としていた。後頭部に血がにじんでいて、起こそうとしたら「イタイ!」と大声を上げた。頭と背中を階段で打ちつけたようだったので、起こさず着替えだけをさせて救急車を呼んだ。その間も、「私、何をしたの?」「どうしたの?」「落ちたの?」と、大変な事態が起こったことを呑み込めていない様子だった。急いで着替えの下着などを準備をしていたところへ救急車が到着。生まれて初めてアベックで救急車に乗った。

緊急処置室で診てもらった結果、幸い頭は打撲だけで異常はなかったが、背中側の肋骨三本が骨折していた。取りあえず応急措置をしてもらい、翌日に大きな病院で検査と処置を受けるように告げられ、タクシーに乗って明け方に帰宅した。

まだ十分に意識が回復していない様子で、「落ちたの?」「何をしたの?」と繰り返し尋ねていた。それからというしばらくの間は、大きな病院での外科通院で半日潰れ、メンタルにも通院と二か所巡りが始まった。

半年近くで骨折は完治したが、体の臓器や血液などの異常は見られないという、これまでの医師の診断がありながらも、「お父さん、今日は〇〇を診てもらってくる」の繰り返しが続いた。

そんな中で、今まで遠くの病院まで自分で車に乗って通ったり、付き添って通ったメンタル病院だったが通院時間や待ち時間のロスなども大きいため、西区に住む次女と私は幸子殿にもっと近くで良いところを探そうと話し合い、通院先を変えて今日まで通院している。

ところがこれがまた大変で、診察の順番待ちというか、受付の始まる前に病院の入り口に並んで待つという仕事が発生した。そうしないと受付の始まる9時前には行列ができ、9時の受付開始のわずかの間に20人前後の患者で待合室はあつという間に一杯になってしまう。

幸子殿は次女の車に乗せてもらって通院する訳だが、私は少しでも待ち時間を短縮させて娘に負担がかからないようにと、8時過ぎには家を出て自転車(雨の日はバスや地下鉄を利用)で先に病院に行き、8時15分前後には順番取りに並ぶ。まさに雨が降ろうか槍が降ろうかである。雪の降る季節や夏の暑い時はさすがにきついし、誰でもそうだと思うが病院で診察を待つ長い時間は「待つだけで疲れる」という思いを避けたかった。今もめげずに並んでいるが、ひたすら幸子殿の回復を願い3年以上も頑張り続けている。

今までは毎年のように春は桜、秋には紅葉などのバスツアーや、幸子殿の運転と私のナビつきで出かける日帰り見物や温泉旅行などもできなくなり、今まで4月、5月には何度となく二人で出かけた潮干狩りも、息子のファミリーと私だけが5月に一度出かけるだけになってしまっている。

気分転換にと散歩や近くの公園に誘ってもなかなか家を出ようとせず、まるで引きこもり状態で、外出はメンタルへの通院だけという非健康的な毎日が続いている。メンタルの医師も季節の良い時期には



散歩などを勧めてはくれているが、そういう気分になかなかならないようである。傍にいて良くなっているのか、いないのかの判断が難しく私自身悩む時も暫しといった状態が続いている。

朝は一番にラジオをつけてお湯を沸かし、味噌汁を作り、洗濯機を回す頃にやっと起きてくるといった日々である。最近では、6時半から始まるラジオ体操には、なんとかフーフー言いながらも体を動かし出すようになってはきている。

夕方には冷蔵庫の中を確認しながら、「何かいるものないか？買って来るものはないか？」と声をかけ、近くのスーパーに買い物に行く。うつ病により献立という本も買い、献立を組み立て調理したりしているが、最近では自ら台所に立って休憩しながらも調理するようにはなってきたので、私に依頼される調理以外は割り切って任せている。

そういった毎日の生活のこともあり、シルバーの仕事もできるだけ近隣の依頼だけに絞らせてもらい、何かあれば直ぐに家に帰れるよう工夫をしている。

うつ病に関する本をいろいろ読んではいいるが、誠にやっかいで根気のいる介護というか、つき合いが大変な病であると思つづく。うつ病は「心の風邪」と言うらしいが、風邪がこんなにも長引くものかと文句をいう所がない腹立たしい気持ちを押さえながらの毎日だ。時には大きな声で叫びたいのを我慢しているが、何かこっちも病気になりそうだ。

今年は結婚して45年目を迎えるが、残された日々の生活のなかで、まだ訪ねていない長崎や佐賀、佐渡島などを二人の体が動く間に旅行したいという思いを捨てたくない。

苦しい時の神頼みではないが、「神様、仏様、イエス様、どうか妻の病気が早く治りますように」と祈るばかりである。両親の遺骨を預けているお寺さんへ盆のお参りに行った際や、初詣などに行く神社では「何はともあれ、一番にお願いと幸子の健康の回復」をと祈願している。

## 8. 残された人生をどう生きるか

数々の世間様との付き合いや自分自身の日々の生活習慣などを含め、どこかで身を引くものは引く、やめるものはやめる。自宅にある家族に関係のない書籍や数々の資料を処分するものはする。譲るものは譲るといったケジメをつける必要があるのだろう。「自分らしく生きて、死ぬ知恵」(斎藤 茂太著、中経文庫刊)を、元気な間に読み直す必要がありそうだ。

そのように考える一方で、最近目立ってきた安倍内閣の進める政策や政治には、不安と怒りで腹が立って仕方がない。復興が進まない東日本大震災の被害処理、原発事故の解明は当然のことながら、多くの人々は故郷に帰りたくても帰れないという根本的な問題。にもかかわらず、電力会社と安倍政権は再稼働を進めているし、海外への輸出まで広げようとしている。

強行採決された秘密保護法・安保法制や改憲論議に始まって、最近では戦時中の苦い教訓を顧みず、大学の軍事研究を進めようとする姿勢や三度も廃案になった監視社会を生み出すと言われている共謀罪を国会で審議中だ。

沖縄における米軍基地の移設問題は深刻だ。世界一危険な普天間基地を閉鎖し、沖縄の基地の整備縮小といいつながら辺野古へ最新鋭の基地建設を強引に進めている。県民の多くが「NO!」と声を上げて、反対運動に立ち上がっているにもかかわらず、推し進めることには全く納得できないし怒りを感じ

る。安保条約に基づく地位協定が存在しているとはいえ、地方自治体の総意を壊すことは、果たして民主主義国家の主権まで奪うことにはならないのか。

さらにマイナンバーカードで、時の権力者が国民を一元管理して、監視するのではと思えるような防犯(監視)カメラの増設など、着々と戦争できる国づくりを進めているという危険性を感じる。

今や世界共通語となった「カローシー」。労働者には「過労死」や「過労自殺」、メンタル障害などで数多くの犠牲者を生み出し、最近では電通の女性の過労自殺が波紋を広げている。「働き方改革」では労働界の意見より、経団連のおえら様方を中心に進めようとしているらしいが、「どうすれば上手に労働者を働かせることができるか」であり、そんなもん「働かせ方改革」と違うのかと叫びたい。「待機児童」問題の解決が進まず、働きたくても働けない女性がたくさんいる。安倍総理はカッコよく国民受けの良いアドバルーンを次々と打ち上げるが、国民が歓迎する具体的な政策は見えてこない。

今日まで、日本を世界有数の経済大国へと支えてきた高齢者は、年金の減額・医療介護制度の改悪などで苦しんでいる。

今後の人生を考えることも大事だが、併せて日本社会に起こっている様々な動きや問題は、間違いなく近い将来に自分の身に迫ってくると考えると、やっぱり体調と時間が許す限りは講演会に出席して勉強をしたり、これは許せんと思えば抗議行動にも参加し続けなければならないと思う。

あつては欲しくないことだけど、ある日突然に癌を宣告されて狼狽えることはできるだけ避けたいとしみじみ思う。なにより、幸子殿に早く治ってもらうことがやっぱり一番やなあと思う。どっちが先にあの世に行くにしても、ボケることなく健康的に?出来れば私が先にコロッとあの世に行きたいものだと正直そう思う。

子供たちに、遺品整理で悩ますことだけは避けなければならない。大した財産はないものの遺言書も元気なうちに作っておかないとだめかな。「立つ鳥 後を濁さず」だ。そんなことも頭に入れて、明日から残りの人生を悔いのないものと思いたいと考えるこの頃だ。

\*古希・・・「70才でお迎えの来た時は まだまだ早いと言え」

ひとまず、これはクリアーした。

\*喜寿・・・「77才でお迎えの来た時は せくな老楽 これからよと言え」

\*傘寿・・・「80才でお迎えの来た時は なんのまだまだ役に立つと言え」

まあ、残りの人生せいぜいこのぐらいまでか。

『過去を振り返るにあたって、事実確認として参考にした書籍』

\*「100万人を破滅させた大銀行の犯罪」

2001年10月2日発行 著者 椎名麻紗枝 講談社

\*「UFJ消滅・メガバンク経営者の敗北」

2004年10月30日発行 著者 須田慎一郎 産経新聞ニュースサービス

\*「頭取が勝てなかった11人の銀行員」

1993年4月20日発行 編著者 成瀬昇・甲賀邦夫・宮崎雄介